

2022年10月3日

みずほディーラーズアイ (2022年10月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 138.00 ~ 148.00

市場営業部 為替営業第二チーム 伊藤 拓義

■ 先月の為替相場

先月のドル/円相場は高値145.90円を記録した後、24年ぶりとなる日銀の円買い為替介入によって上値が押さえられた。月初ドル/円は139.30円付近を中心に揉み合いとなったが、米長期金利上昇を受けて約24年ぶりの高値となる140.23円まで急伸。2日、米8月雇用統計が堅調な結果を受けて、米休日明け6日にはドル/円は143円台まで上値を伸ばした。7日、ドル/円は更に騰勢を強め、日米の金利差を意識した取引が継続。海外時間には一時144.99円を記録し145円に迫るも、世界景気減速懸念から米金利上昇も一服し、一転144円付近まで下落した。その後、9日には財務省・日銀・金融庁の3者会合実施の報道から急速な円安への牽制が意識され141円台まで下落している。13日、ドル/円は米8月消費者物価指数の市場予想を上回る結果を受け144円台半ばまで急伸、その後も高値圏を維持し、14日にはドル/円は144.96円をつけた。しかし、その後本邦政府高官からの円安牽制発言や日銀のレートチェック実施の報道があり、再度142円台半ばまで下落する流れとなった。19日、日英休日の中でもFOMCを控えてドル買い優勢の展開。21日、ドル/円はプーチン露大統領による軍の部分動員開始の報道を受けてリスク回避の円買いの動きが強まる場面もあったが、海外時間に実施されたFOMCで+75bpの利上げとともにドットチャートでの政策金利見通しが大幅に引き上げられるとドル/円は144.70円まで急伸。ただ、その後のパウエルFRB議長会見では今後の利上げペースに関する慎重な姿勢を見せたことで一時143円台半ばまで急落と荒い値動きとなった。22日、日銀金融政策決定会合での政策変更なしの思惑から朝方から円売り優勢。予想通り声明文発表で政策変更なしを確認するとドル/円は145円を突破した。その後当局の円安牽制発言などを受けて相場は乱高下するが、黒田日銀総裁のハト不変姿勢に高値145.90円を記録。ただ、その後24年ぶりとなる日銀の円買い為替介入が実施されたことが伝わると140.31円まで急落。その後海外時間に143円台まで戻すものの再度140.35レベルまで急落するなど荒い展開となった。23日、東京休日であったが、英国の大型減税発表をきっかけに、世界的に金利が急上昇。強烈なドル買い相場となるとドル/円は143円を回復した。週明けも英国発のリスクオフの余波に米10年金利は4.0%をつけるなどドル買いが強まりドル/円は上昇。ただ、145円に近づくと為替介入が意識されてか上値が重い展開となった。28日、英国の介入に相場は落ち着きを取り戻すものの、英国財政懸念は拭いきれず。30日、ドル/円は新規材料に乏しい中で144円台での取引が続いている。

■ 今月の見通し

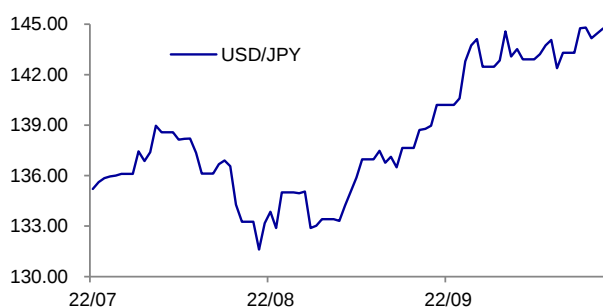
10月のドル/円相場は為替介入を警戒しながら、根底にある強い円売り需要に底堅い相場の継続を見込む。ただし、米インフレ指標結果によっては一時的に調整が進む可能性もあると予想。

ドル/円相場は基本的にはインフレ抑制に挑む世界主要中銀と日銀の政策スタンスの違いを背景に円が売られやすい相場は続き、24年ぶりの高値更新も視野に入っている状況。現在の円安は日米金利差にそったものである上、実需フローがドル買い超の中ではじわじわと円安が続いていくことは必然か。黒田総裁は会見で「インフレ見通しが2%を恒常的に上回るものにならない限り、現在のフォワードガイダンスの強い緩和バイアスは今後2～3年間は維持されるだろう」と述べていた。黒田日銀総裁が会見で明言したように退任までは政策変更をしないという意味として言葉通り受け取る必要はないが、この発言を受けてドル/円は急上昇し、為替介入に踏み切らざるを得なくなったのは間違いない。要は現日銀の政策スタンスは円安を進行させるものと当局も認識しているため、為替介入は円安進行スピードを抑えられればいいくらいの見解だろうと推測される。そのため、各チャートポイントでは市場に付け込まれ相場の乱高下を誘発することになるだろう。結局、日銀の政策スタンスに反して為替介入を行っても円安トレンドの反転は難しいのではないかと。

しかしながら、9月のFOMCでのドットチャートの引き上げによって、米国の今後の利上げ織り込みが相応に進んでおり、ここからの米金利上昇は限定的とも言える。現状(9/30時点)ではもう少し利上げ織り込み余地はあるものの、13日に発表される米9月CPIにおいて、インフレの減速が確認できればドル/円は一旦のピークをつける可能性もありそう。FED高官達はインフレ抑制を最優先とする方針に足並みが揃っていることからドル/円も高値を試す動きが強まっているが、一時的な時間稼ぎができれば御の字だろう。日米要因の他には英国の相場動向には注意が必要か。トラス首相が大型減税政策を打ち出して以降、英国売りが止まらない。英中銀の介入によって一旦落ち着きを取り戻したものの、財政懸念は拭えず、再度市場にボラティリティを供給する可能性が高い。英国の金利上昇によるリスクオフやボンド下落によるインフレ圧力の高まりがドル高に繋がり、ドル/円が高値を試す可能性に注意。

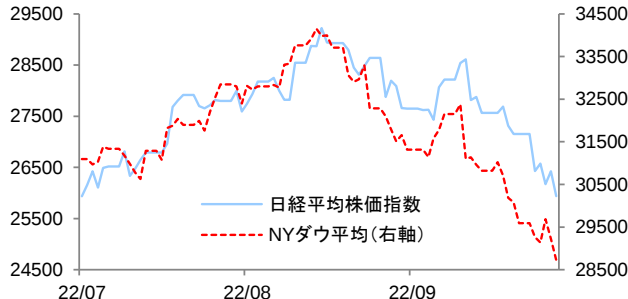
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	米ISM製造業指数	8月	51.9	52.8	
9/2	米非農業部門雇用者数変化	8月	298K	315K	528K
9/8	ECB主要政策金利	9/8	1.25%	1.25%	0.50%
9/13	米CPI(前年比)	8月	8.10%	8.30%	8.50%
9/21	FOMC政策金利(上限)	9/21	3.25%	3.25%	2.50%
9/22	日銀政策金利	9/22	-0.10%	-0.10%	-0.10%
9/22	BOE政策金利	9/22	2.25%	2.25%	1.75%
9/30	EU消費者物価指数(HICP速報)	9月	9.7%	10.0%	9.1%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	14名	147.25 ～ 141.75	ベア	4名	147.00 ～ 140.00
※ レンジは中心値					

矢野	ブル	147.00 ～ 142.00	24年ぶり円買い介入も長くは持続せず。さらなる円安進行時には追加の円買い介入警戒感が高まることから上値の上昇余地は限られるが、一方で下落する理由も見当たらない。引き続き米利上げ観測が台頭する中で底堅い推移を予想。
牛島	ブル	148.00 ～ 140.00	介入後は145円手前で幾度か上値を押さえられているものの、介入効果が薄れて高値更新するのは時間の問題。円が唯一のマイナス金利通貨でありFEDが年内125bp利上げが期待される中、ドル高トレンドは継続。
筒井	ブル	147.50 ～ 140.00	米国のインフレ、日本のデフレ々々への金融当局姿勢は変わらず。よって日米金利差は更に拡大し円安傾向は継続。急激な変動抑制を企図した為替介入を市場は意識しており、円安上限めどは98年の147円後半。
加藤	ベア	147.00 ～ 140.00	FOMCでターミナルレート予想が切り上げられた一方で、黒田日銀総裁が数年金利を上げることはないと言ったことによる余波は続き、基本は上目線。ただ、本邦による介入警戒感は一程度ドル/円相場上昇スピードを鈍らせる。
山崎	ベア	147.00 ～ 140.00	先日の本邦当局による介入により145円付近を天井として、上値の重い展開が続いている。トピックスが欧州圏に移り、景気後退がいわれる中で、不安定な値動きとなると予想するも上値が重い展開を予想する。
伊藤	ベア	148.00 ～ 138.00	10月のドル円相場は強い円売り需要に底堅い相場の継続を見込むものの、米インフレ指標の結果によっては一時的に調整が進む可能性もあると予想。2023年の米利上げパスに修正が入れば、ドル円は一旦ピークをつけ下落すると考える。
山岸	ブル	147.00 ～ 142.00	コロナ禍での金融緩和・高圧経済の影響と思われるインフレにピークアウトの兆しなく、米国の利上げ・金利上昇に天井感が見えるまで、ドル高トレンドは継続。日銀スタンスに変化なく、加えて不安定な市場環境下でドルが買われやすい。
尾身	ブル	147.00 ～ 142.00	米国の積極的な金融引き締めを受けてドル/円の上昇基調は継続すると予想。但し、円安牽制を受けてスピードは緩やかとなりそう。また、ドルインデックスが高いため、ドル高の調整には警戒している。
上野	ブル	147.00 ～ 142.00	トレンド転換点となりうる材料は特段見当たらず円安基調が続く公算が大きい。一方で9/22が替介入を受けて高値圏では介入警戒感が高まりやすい。
甲斐	ブル	147.00 ～ 142.00	ドル一強の市場環境継続を予想。じり上がりは避けられないと思われる。米CPIはYOYでみれば、9月分もコアが強含む可能性は残っており、一段の利上げ期待の高まりには留意が必要か。
小野崎	ベア	146.00 ～ 140.00	円買い材料の乏しさは不変ではあるが146円を前に為替介入に踏み切った事実は介入警戒につながり上昇スピードは鈍化する。24年前の高値水準にも近付き高値警戒感の意識されやすい水準にあると考える。
原田	ブル	155.00 ～ 140.50	ついにマイナス金利政策を続けているのは日銀のみとなり、よりタカ派に傾倒しつつあるFRBの姿勢の対比はテーマにしやすい。円買い介入の警戒感はあるものの、ドル円上昇の流れは継続すると予想する。
上遠野	ブル	147.00 ～ 140.50	9月の中銀会合を終え、本邦金融緩和スタンスが一段と浮彫となり相対的な円の弱さは変わらず。もともと、政府・日銀による追加介入が意識される中で上値は抑えられやすく高値圏での攻防継続か。
小林	ブル	153.00 ～ 140.00	米FRBは年内大幅な追加利上げを明言している一方、日銀は緩和スタンスを維持。日本当局による介入懸念があるものの、世界中でマイナス金利政策を継続しているのは日本のみとなっており、ドル円は引き続き上昇トレンドと予想。
逸見	ブル	148.00 ～ 140.00	145円以上では為替介入が意識され、投機的な動きによる急激な円安は考え難くなったが、日米金融政策差のコントラストはより鮮明となっており、結局はドル買い優勢の展開を予想。
鈴木	ブル	148.00 ～ 141.50	為替介入の影響で上値は押さえられているが、金利格差や需給環境が変わったわけではなく、その効果の持続性には懐疑的な見方も強い。引き締め姿勢を崩さない米国との格差は依然として大きく、引き続きドル高基調を予想。
木村	ブル	149.00 ～ 142.50	欧州通貨が債券価格の変動に連動して乱高下するなかドル円は他国の金利低下につられた下落幅が小さく、円売り圧力は相応に強い状況。為替介入を警戒しつつもじりじり上昇していく相場となることを予想。
大熊	ブル	147.00 ～ 142.00	日米の金利差拡大と金融政策の方向性の違いが明確になる中、ドル買い地合いは継続か。介入への警戒感が高まりやすいものの、過去最大の円買い介入が実施されても早々に効果が薄れている状況を鑑みると、ドル/円は底堅い展開を予想。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 0.9500 ~ 1.0100
EUR/JPY 137.00 ~ 144.00

市場営業部 為替営業第二チーム 尾身 友花

■ 先月の為替相場

1日、ユーロ/ドルはユーロ圏の景気後退懸念が煽る中、上値重く推移、一時週安値の0.9910まで急落した。週末2日もユーロ/ドルは上値重く推移。ノルドストリーム1の稼働再開が延期されたことによりエネルギー供給問題が再燃。週初5日は、前週末の流れを引継ぎユーロ売りが優勢、ユーロ圏8月PMIの下方修正をはじめ経済指標が軟調に終わったことも意識され、一時0.99を割り込んだ。6日は、米金利上昇を受けたドル買いが優勢となり、ユーロ/ドルは約20年ぶりの水準まで落ち込んだ。7日、ユーロ/ドルは下落が一服し、次第に値を戻す展開。翌日にECB政策理事会を控え、ECBがインフレ抑制のために利上げ幅を拡大する予想も強まり、終盤にかけてユーロ/ドルは1.00を回復した。8日、ECB政策理事会にて75bpの利上げが発表され、一時週高値の1.0030まで上昇したが、域内の景気減速懸念は根強く、0.99台前半まで反落した。週末9日、ECBメンバーのタカ派的な発言を受けて、ユーロ/ドルは1.00台にて堅調推移した。週初12日は、欧州株の堅調推移も加わり、ユーロ/ドルは一時週高値の1.0198まで上昇した。13日、ユーロ/ドルは一転、米経済指標の強い結果にドル買いが加速し0.99台後半まで急落、再びパリティ割れとなった。14日、ユーロ/ドルは前日のドル買いの流れが継続し、一時週安値の0.9956をつける場面も見られた。15日、ユーロ/ドルは、欧州株の堅調推移にユーロ買い優勢となり1.00台を回復して揉み合いとなった。週末16日のユーロ/ドルも1.00付近での揉み合いが継続。週初19日も、ユーロ/ドルは引き続き1.00を挟んでの揉み合い。20日、ユーロ/ドルは東京時間に一時週高値の1.0051まで上昇も、海外時間では米経済指標の市場予想を上回る結果や米金利上昇にドル買いが加速、0.99台半ばまで押し戻された。週末21日、米FOMCの内容を受けてドル買いが加速し、0.9810まで急落した。22日も、ユーロ/ドルの安値更新は続き、0.96台後半まで下落した。週初26日、ユーロ/ドルは英ポンドの急落に連れ安となり、0.9528まで急落、年初来安値を更新した。ただ英中銀(BOE)が緊急声明を出し、英ポンドが反発、ユーロ/ドルも連れ高となり0.97台を回復した。27日、0.96台まで下落して揉み合っている後、ドル買いが加速し、0.95台後半まで値を下げた。28日、週初の安値圏付近までじりじりと下落も、その後はBOEの英国債購入の発表を背景に米金利も低下、ドル売りが加速し、0.97台半ばまで急伸した。29日、ユーロ/ドルの買戻しは継続し、一時週高値の0.9815まで急上昇した。週末30日も0.98付近の高値水準にて取引が継続した。

■ 今月の見通し

ユーロは対ドルでユーロ売りが継続するだろう。また、対円では、足元円安のスピードが緩慢となっているため、緩やかなユーロ安となるのではないかと

先月まではユーロは対ドルでパリティ(1EUR=1USD)付近にてレンジ推移となっていたが、先月の米FOMC通過後は明確にパリティを下回る下落となった。ECBも金融引き締めをおこなっているが、FEDの金融引き締めがかなり強く、欧米の金融政策差からはEUR売りUSD買いが優勢の展開が続きそう

だ。また、金融政策差以外のユーロ安要因として、ノルドストリームの稼働停止がある。ロシアによるウクライナへの軍事侵攻に対する金融制裁への報復として、ロシアから欧州へのガス供給が停止している。この為、ユーロ圏ではエネルギー問題による景気減速懸念が根深く、ユーロの下押し圧力となっている。

それ以外にも、欧州域内金利差が拡大しており、南欧諸国の財政悪化懸念が深刻化している。ECBの利上げに伴い、域内の財政基盤の脆弱な国の国債利回りが上昇している。ECBは域内金利差抑制措置を検討しているが、域内金利差拡大は継続しており、不公平感による地域分断も懸念されるほどだ。かかる状況下、イタリアでは政権交代が実現し、財政拡張路線・反ユーロの新政権が誕生しており、イタリア国債には更なる利回りの上昇懸念が出てきたとともに、地域分断の懸念も強まっており、今後一段のユーロ安要因となる可能性もある。

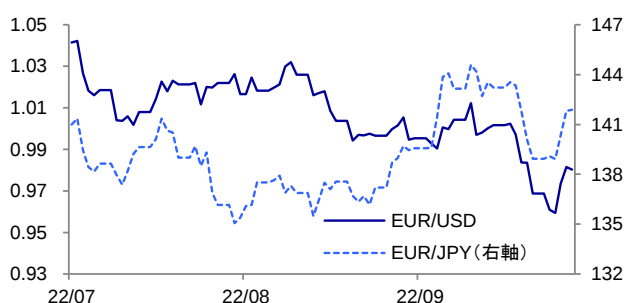
また、対円では日銀が大規模緩和を継続しているため、金融政策差の観点からユーロ高円安となっていたが、先月円安が急伸したことを受けて、本邦政府高官らによる円安牽制発言や、政府日銀による介入が行われたことで、円安スピードが鈍化し、ユーロ安円高が緩やかに進みそう

リスクはドル高の調整と考えている。先月末に、英国の財政政策を受けたポンド安にユーロは連れ安となり、相対的にドル高がかなり進んだが、その後ポンドの反発を受けてドル売りが優勢の展開が続いている。ドルインデックスも高水準にいたるため、ドル高の調整が続くようであれば、ユーロの下落も緩慢になるだろう。

来月は、18日(火)独・9月ZEW景況指数、19日(水)欧・9月CPI、27日(木)ECB理事会が予定されている。中旬に発表される景況感やインフレの指標にて景気動向を確認して、月末の政策理事会での利上げ幅を探るような相場展開となるのではないかと。

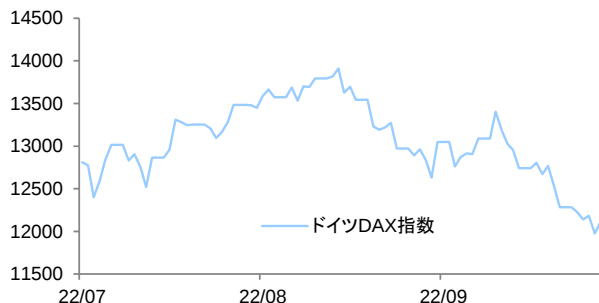
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/5	ユーロ圏小売売上高(前月比)	7月	0.4%	0.3%	1.2%
9/7	ユーロ圏GDP(前年比)・確報	2Q	3.9%	4.1%	3.9%
9/8	ECB主要政策金利	9月	1.25%	1.25%	0.50%
9/13	独ZEW景気期待指数	9月	-59.5	-61.9	-55.3
9/14	ユーロ圏鉱工業生産(前月比)	7月	-1.1%	-2.3%	0.7%
9/16	ユーロ圏CPI(前年比)・確報	8月	9.1%	9.1%	9.1%
9/23	ユーロ圏マークイット製造業PMI	9月	48.8	48.5	49.6
9/23	ユーロ圏マークイットサービス業PMI	9月	49.1	48.9	49.8
9/23	ユーロ圏マークイットコンポジットPMI	9月	48.2	48.2	48.9
9/26	独IFO企業景況感指数	9月	87.0	84.3	88.5

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ

ブル	2名	1.0150 ～ 0.9625	ベア	16名	1.0000 ～ 0.9500
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------

※ レンジは中心値

矢野	ベア	1.0000 ～ 0.9500	ユーロ圏ではノルドストリーム の 損傷を受けて今後のガス需給懸念、景気減速懸念が改めて意識される。対する米ドルは底堅く推移していることから、EURを積極的に買い進める理由は見当たらず。軟調な展開を予想。	甲斐	ベア	1.0100 ～ 0.9400	ロシアによる一部地域の併合宣言などもあり、地政学リスクの更なる高まりやリセッション懸念からのユーロ売りは継続すると予想する。ただし、月末のECBでは一段のタカ派化が意識され、買い戻される局面もあるか。
牛島	ベア	1.0000 ～ 0.9500	米ドルが対主要通貨で独り勝ちとなる状況が継続するとみられる。ウクライナ情勢に端を発した欧州ガス価格の高騰やインフレ懸念、財政拡大政策から英ポンド安への懸念が熾っていることもユーロの重しとなろう。	小野崎	ベア	1.0000 ～ 0.9200	ウクライナ問題は健在。また、域内インフレ問題、イタリア政治等問題は山積みの欧州圏。EUR買いに転じる材料には乏しく安値更新を見通す。
筒井	ベア	0.9850 ～ 0.9000	ユーロ安スピードは加速。米国と違い外部環境からインフレが進む欧州は、利上げの景気への影響は更に顕在化し、市場はECBの利上げ停止を折り込む。金利差からのユーロ安は加速と想定する。	原田	ベア	1.0000 ～ 0.9500	エネルギー価格の上昇や、イタリア極右政党の台頭、ロシア情勢など不確実性が高い状況下、EURを積極的に買う地合いにはない。米国と同じく利上げ局面であるものの、上記状況鑑み、ドルに対して弱含む展開が継続すると予想。
加藤	ブル	1.0100 ～ 0.9650	BOEによるLDI対策に代表されるように各国の債券市場への対応が鍵。米国を筆頭とした各国の拙速な利上げが債券市場の混乱を通して実体経済に悪影響を及ぼし始めており、各国当局がどのように対応するかが為替相場に大きく影響する。	上遠野	ベア	1.0050 ～ 0.9550	止まらぬインフレに対しECBは利上げ姿勢を強めるも、同時に景気減速の一段加速、金利格差の拡大やイタリアをはじめとした政局の不安定さを意識しつつユーロは軟調推移を継続か。冬場にかけてのエネルギー供給不安も上値を抑えよう。
山崎	ベア	1.0000 ～ 0.9500	ユーロは引き続き軟調な展開を予想する。ウクライナをめぐる戦争も継続、インフレ問題、冬入りによる燃料価格問題の深刻化等、問題山積。一方下値付近では割安感から買いが入ることも想定する。	小林	ベア	1.1000 ～ 0.9500	米FRB同様ECBも大幅な利上げを開始したものの、イタリアなどの政治不安・欧州圏の景気低迷・冬季を前にしたエネルギー不足問題などが改善しない状況下、ユーロは引き続き対ドルで軟調推移となろう。
伊藤	ベア	1.0200 ～ 0.9000	高いインフレ率抑制のためECBは利上げ速度を速めているものの、欧州エネルギー価格懸念に終息が見えない中でスタグフレーションリスクが高まっている。更に英国発の世界的な市場リスクの高まりが、EUR下落を促す蓋然性を高める。	逸見	ベア	1.0000 ～ 0.8900	ECBは利上げに踏み切ったものの、地政学リスクの影響を最も深刻に受けており、連続利上げに耐えられる経済状況ではない。インフレピークアウトの兆しも見えない中、欧州からの資金流出が継続すると考える。
山岸	ブル	1.0200 ～ 0.9600	エネルギー問題など懸念あるも、利上げ観測で底堅い展開を予想。物価上昇長期化でECBはインフレスパイラルを警戒、独9月CPIはEU基準10.9%上昇、ECBの23年インフレ見通し5.5%は楽観的で、利上げ余地大きいと見る。	鈴木	ベア	1.0000 ～ 0.9600	エネルギー問題やウクライナ情勢の長期化等、利上げ局面でも堅調な経済状況が続く対ドルで、ユーロを買う理由は見当たらない。引き続き軟調な推移を予想する。
尾身	ベア	1.0100 ～ 0.9500	欧州におけるエネルギー問題や景気鈍化懸念などが、ユーロ/ドルの重しとなり下落すると予想。また、ECBによる積極的な利上げが相場の底支えとはならず、米国の積極的な利上げ姿勢もユーロを押し下げる要因となりそう。	木村	ベア	1.0000 ～ 0.9000	米金利上昇の頭が抑えられたことで持ち直しつつあるに見えるユーロ相場だが、欧州圏PMIの軟調さ、ロシア・ウクライナ間での情勢不安の再燃、それに伴う域内インフレの進行など不安材料は不変であり、中期的には上値重いと予想。
上野	ベア	1.0000 ～ 0.9500	高いインフレ率、弱い経済動向、熾る地政学リスク。引続き、ユーロには明確な買い材料が乏しい状況となっている。足元のユーロの軟調推移に一服感もあるが、再び弱含む蓋然性が大きいと予想。	大熊	ベア	1.0100 ～ 0.9600	欧州のエネルギー危機が深刻化する状況下、イタリアの極右政党の台頭や不安視される英国の経済対策等、ユーロの重しとなる要因は多い。ロシアとウクライナの戦況が好転しない限りは上値重く、下値を模索する展開を予想する。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.0500 ~ 1.1200
GBP/JPY 150.00 ~ 160.00

欧州資金部 マクルヒル ジョセフ

■ 先月の為替相場

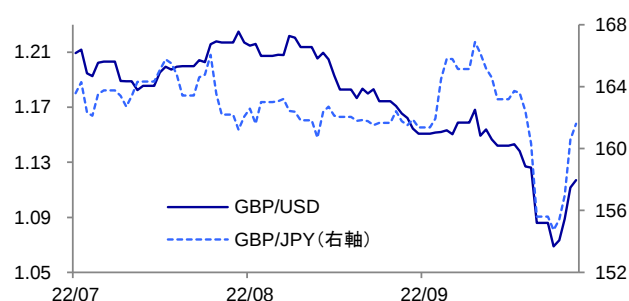
先月の英ポンド相場は、全面急落。22日の東京時間夕方まで、主要通貨市場の趨勢はドル全面堅調にあり、ポンドも、対ドルで軟調に推移する一方、対ユーロでは気持ち堅調、対円でも方向感の交錯した横ばいを先行させた。ドル堅調の背景には、米連銀公開市場委員会の75bp利上げ決定(21日)があった。この利上げ幅自体は予想通りだったものの、来年にかけての政策金利見通しが明確に引き上げられたことを受け、前後してドルは全面堅調に振れた。対照的に、翌22日、日銀金融政策決定会合が、各種政策の据え置きだけでなく、9月末で期限切れを迎えるはずだったコロナ対策(新型コロナ対応金融支援特別オペ)の延長を決めたことを受け、同日の東京時間夕方までに円は対ドルで145.90まで統落。ここで日銀が24年ぶりの円買い為替介入に出動(介入の主体は財務省)。ポンド/円も、週の高値164.42円から、僅か数時間で159.09円まで急落した。しかし、ポンドの下落はここで止まらなかった。同日(22日)の英中銀金融政策決定会合の結果(後述)発表はほぼ無風に通過したものの、翌23日、クアタング財務相が発表した各種減税燃料補助金支給などが、事前予想(300億ポンド前後)を大幅に上回る総額450億ポンド規模とされたことを嫌気して、ポンドは本格的に下げ足を加速した。財源を国債発行に頼る巨額の財政拡大策に、財政悪化懸念、物価上昇懸念の両面から英国債が急落、10年物国債利回りは22・23日の2営業日で50bp超上昇(価格は下落)した。ポンドは全面急落となり、対ドルで37年ぶりの安値を更新する1.0840、対ユーロで20か月ぶりの安値を更新する0.8935まで急落。対円でも6か月ぶりの安値を更新する155.32円まで下落した。25日(日)にBBCニュースのインタビューで英財務相が、「市場の短期的な動きではなく経済の成長に重きを置いている」、「まだ追加の措置がある」と発言したことを受けて、翌日東京時間でポンドがさらなる暴落を見せる展開となり、対ドルで1.0327まで売られ、史上最安値を更新した。ロンドン取引時間ではこれらの市場の混乱を受けた英中銀による緊急会合開催の期待がくすぶり、ポンドが1.08台まで回復したが、同日取引クローズ時点で同中銀行からは「緊急措置の導入に躊躇しない」と表明していたものの政策変更自体はなかった。

■ 今月の見通し

今月の英ポンド相場は、足元安値水準での膠着を予想。7月6日に発足したトラス新政権だが、エリザベス女王への服喪を経て、20日以降、漸く本格稼働したはずが、金融市場(と有権者)の評判は芳しくない。長期金利上昇(国債価格などは下落)は米、ユーロ圏などを含む世界的な潮流と言って構わないだろうが、財源を国債発行に頼る財政大盤振る舞いを嫌気して、英国債のそれは突出している。その背景に、上述のような構造的要因(財政悪化懸念、物価上昇懸念の両面)がある以上、この傾向が早期転換する可能性は考え難いのではないかと。財政バラマキそのものは有権者一般に受け入れ易いものだろうが、「銀行員のボーナス上限撤廃」や「45%の最高税率撤廃」などは「高額所得者」を更に豊かにする政策として、保守党的=富裕層優遇という批判も聞かれる。並行して、ポンドに弱気になる要因に、英中銀の利上げ姿勢が、米連銀、欧州中銀などのそれとの比較で「消極的」に映る点も挙げられる。ドルやユーロの値動きに読み取れるように、政策金利上昇(見通し)は、昨今の通貨市場では、通貨買い要因と読まれる傾向の方が強い。英中銀金融政策委員会による22日の決定は、基準金利の50bp引上げ(1.75%→2.25%)は、確かに米連銀、欧州中銀の75bp利上げとの比較で「腰が引けている」ように見えたかもしれないが、9人の委員のうち3人が75bp利上げに投票していた点などは、むしろ「予想外にタカ派的」と受け止めることもできたはず(ただし、タカ派の先鋒だったソーングダース委員の後継として就任したディングラ委員は+25bpに投票)。

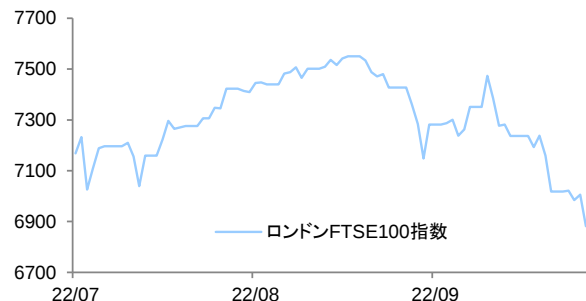
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	S&P Global/CIPS UK Manufacturing PMI		46	47.3	52.1
9/5	外貨準備高変化	8月		-\$1798m	\$31m
9/12	Monthly GDP (MoM)	8月	0.30%	0.20%	-0.60%
9/12	鉱工業生産(前月比)	7月	0.30%	-0.30%	-0.90%
9/12	製造業生産(前月比)	7月	0.30%	0.10%	-1.60%
9/12	サービス業指数(前月比)	7月	0.40%	0.40%	-0.50%
9/13	ILO失業率(3か月)	7月	3.80%	3.60%	3.80%
9/22	イングランド銀行政策金利	9月	2.25%	2.25%	1.75%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6280 ~ 0.6840
AUD/JPY 91.70 ~ 97.70

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

9月1～12日は0.68から0.69台へ上昇。月後半は月間高値0.6916を記録後、550pips以上下落した。1日は中国四川省成都市の都市封鎖でリスクオフの流れから0.67台へ下落。豪2Q設備投資が減少した事も上値を押さえた。2日は米8月雇用統計を受けて0.67後半から0.68台半ばへ上昇。米8月雇用統計は労働参加率が改善し、平均時給の上昇圧力が鈍化した事で家計の値上げ許容度が悪化するとの見方から米金利が下落し、ドル売りから0.68前半で越週した。6日、RBAは政策金利を予想通り+50bp引き上げ2.35%とした。声明文では「供給サイドの問題解決でCPI上昇率の減速を予想している」とあり、会合後は0.6730近辺へ下落。7日、0.67下をトライするも跳ね返され、原油安を背景とする米金利低下の動きに0.6770へ上昇。8日、RBAロウ総裁が「キャッシュレートの上昇につれ、金融引き締めペースを緩める根拠が強まる」と指摘し、豪中銀による大幅利上げ終了の可能性が示唆された。9日は資源価格の反発で豪ドルも上昇し、0.6847で越週。12日、ECB高官によるタカ派発言からユーロが大幅上昇。米ドル売りの流れから豪ドルは0.69まで上昇した。13日、月間高値0.6913を記録後、米8月CPIが予想を上回り、0.67台前半まで急落。16日に0.66台後半まで下落したが、ミシガン大1年期待インフレ率が低下したことでドル売りとなり0.67台前半で越週。19日は豪9月RBA議事要旨で中立金利に近付いている事が言及され+25bp利上げの可能性も議論されていたことが判明。ハト派な内容となり0.66半ばから0.65前半まで下落。21日FOMCでは+75bpの利上げを決定。FRBメンバーによる2022年の金利予想が切り上がっており利上げペース継続が意識され豪ドルは一段安となった。対円では日銀為替介入で円高が進んだ。23日は英政府が大型減税の発表後、インフレ高進に起因する金利上昇への懸念が高まりリスク資産の売りが加速した。26日・27日は連日各主要中銀高官のタカ派姿勢がリスク資産や豪ドルの重しとなった。28日はドルの逃避需要でドルインデックスが過去最高値を記録。ドル買いの流れから安値を0.6363まで更新した。その後、英中銀が英国の大型減税を受けた市場の混乱を鎮静化する為、緊急国債購入を発表。英国債の急上昇を受けて米債も上昇し、米金利低下からドル売りとなり0.65台前半まで反発した。月末にかけてはブレイナードFRB副議長がタカ派姿勢を再度示した事で米株S&P500が2年半以来の大幅下落を記録。月末特有の米債売りもかき、米金利が上昇した事で豪ドルは再び0.64を割り、0.6390まで下落した。

■ 今月の見通し

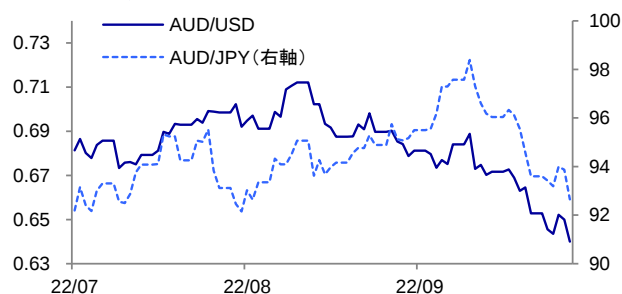
9月は8日ロウRBA総裁が「キャッシュレートの上昇につれ、金融引き締めペースを緩める根拠が強まる」と指摘し、9月RBA会合議事録で+25bp利上げについても検討されていたことが判明し、豪中銀による大幅利上げ終了の可能性が示唆された。一方で、FOMCで発表されたドットチャートではインフレ率やターミナルレートの見通しが上昇しており、米金融当局者の複数が依然とタカ派姿勢を維持したことで今後金利差拡大を織り込む動きが見られた。また、米8月CPIが予想を上回る上昇を見せたことでもドル買いの流れを強めた。10月も徐々に米豪金利差を拡大させていくという全体的な流れは変わらないとみている。

英国では大型減税の景気刺激策が発表後、インフレ高進で英中銀による金融引き締め圧力増大(金利上昇)への懸念が高まり、株式、債券、通貨のトリプル安を誘発した訳だが、その後の緊急英国国債購入発表で債券に買戻しが入り、英金利が下げると、米債金利にもその動きが波及し、米金利低下に伴いドル売り戻しで豪ドルが支えられた。こちらに関してもリスクセンチメント悪化を助長させている事からドルの逃避需要が拡大しており、豪ドルが重く推移する可能性が高い。

10月は9月に豪ドル反落をトリガーした米国消費者物価の過熱感が続いていると捉えられれば、物価安定を優先させたい米金融当局高官らからタカ派コメントが繰り返され、豪ドルは再び安値を更新するとみる。注目経済指標は4日、10月RBA会合での声明文、7日、米9月雇用統計、13日、米9月CPI、20日、豪9月雇用統計に注目したい。その他、9月は英中銀だけでなく日本銀行による介入があり、この度、中国の中央銀行が中国元の下落を食い止める為、国有銀行に対してドル売り介入の準備を要請したとされており、各国中銀による市場介入に対する豪ドルへの影響も気をつけたい。

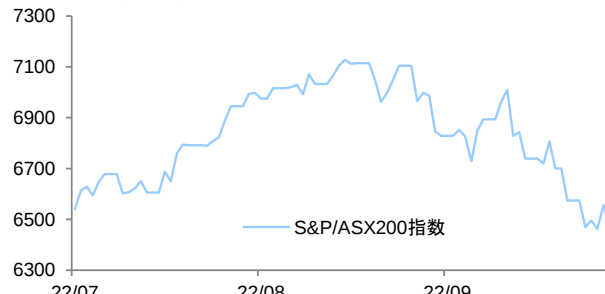
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
9/6	RBAキャッシュレート
9/7	GDP(前年比)
9/8	貿易収支
9/13	消費者信頼感
9/13	NAB企業景況感
9/15	雇用者数変化
9/15	失業率
9/15	参加率
9/20	RBA9月議事録要旨
9/28	小売売上高(前月比)

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
9月	2.35%	2.35%	1.85%
2Q	3.40%	3.60%	3.30%
8月	A\$14650m	A\$8733m	A\$17131m
9月	-	3.9%	-3.0%
8月	-	20	19
8月	35.0k	33.5k	-40.9k
8月	3.4%	3.5%	3.4%
8月	66.6%	66.6%	66.4%
9月	-	-	-
8月	0.4%	0.6%	1.3%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2900 ~ 1.4000
CAD/JPY 102.00 ~ 110.00

米州資金部カナダ室 岩田 保子

■ 先月の為替相場

9月、USD/CADは1.313でオープン。同月は月半ばから、USD高のトレンドが顕著になった。

月初はFRB要人のタカ派発言が続く中、米8月雇用統計で平均時給の伸びが鈍化したことから、USD/CADは上値が重く1.31台で推移。7日にはカナダ中銀会合があり、大方の予想通り0.75%の利上げを決定、政策金利は3.25%へと引き上げられた。カナダ中銀は声明文で、「インフレ見通を考慮すると、さらなる利上げが必要」とし、積極的な利上げ姿勢を維持。9日に発表されたカナダの8月雇用統計では、ネット雇用変化が予想に反して3か月連続で減少。失業率は前月の4.9%から5.4%へと上昇したが、正規従業員の平均時給は前月を上回る前年比+5.6%へと上昇したことから、CAD安方向には振れず、1.30台での取引が続いた。

大きな変化があったのは、13日に発表された米8月消費者物価指数(CPI)。ヘッドライン、コア共に予想に反して前月から上昇したことで、市場では9月FOMCでの“少なくとも”0.75%の利上げは確実という見方が広がり、米金利も上昇。前週半ば以降、売りが続いていたUSDは主要通貨に対して上昇へと転じ、1.29台で取引されていたUSD/CADも再び1.31台へと上昇した。その後は、FRBの大幅利上げによるリセッション懸念、コモディティ価格下落等を背景にCAD売りの流れが継続。

20日に発表されたカナダの8月CPIは2か月連続の低下。そのため、カナダの金利が低下、上昇を続ける米金利との差が拡大したことで、USD/CADは1.33台へとCAD売りが続いた。翌21日のFOMCでは、市場の予想通り0.75%の利上げが行われ、FFレートの誘導目標は3.00%~3.25%に引き上げられた。同時に発表されたFOMC参加者による政策金利見通し(ドットチャート)では、市場予想よりも高い水準(中央値)が示され、発表後、米金利は急伸、USD高が加速し、USD/CADは1.35台へと突入。23日に発表されたカナダの7月小売売上高は前月比▲2.5%となり、昨年12月以来のマイナス。ガソリン以外にも、売上減は新車や中古車販売、衣類・服飾品など広範囲に見られ、インフレと金利上昇の影響が現れた結果になった。

月末は英トラス新政権による大型減税を含む景気刺激策が発表され、さらなるインフレ懸念が高まり、英ポンドとリスク資産が大きく売られる中で、USD/CADは一時2020年5月以来となる1.3808までCAD安が進んだ。

■ 今月の見通し

9月半ばに米国の8月CPIが発表されて以降、国債の2年債利回りが米国とカナダで逆転した。それ以前は、カナダ2年債利回りが米国債を上回る、あるいは、ほぼ同じレベルで推移してきたが、米8月CPIが総合、コア共に前月を上回ったことで、市場では今後もFRBが積極的な利上げを継続するとの見方が強まったことを契機に、米2年債利回りがカナダ債の利回りを上回って急伸。さらに、カナダの8月CPIが前月から低下するといった米国とは対照的な結果になったことで、両国の2年債利回りの差が広がっている。

またすでに冷え込みを見せている住宅市場に加え、雇用統計、小売売上高、鉱工業売上高等、9月に発表されたカナダの経済指標は総じて軟調で、米国とは経済状況が異なってきたようにも見える。

現在、市場が織り込んでいるカナダの政策金利見通しは今年末で4%、ターミナルレートは2023年3月の4.25%となっており、米国より低いレベルになるものと予想されている。

カナダ中銀は現時点では、ソフトランディングの可能性を未だ主張しているが、10月26日の会合では政策金利とともに最新の経済見通しが発表されることから、ソフトランディングの可能性について見解を変えてくるかどうか注目される。

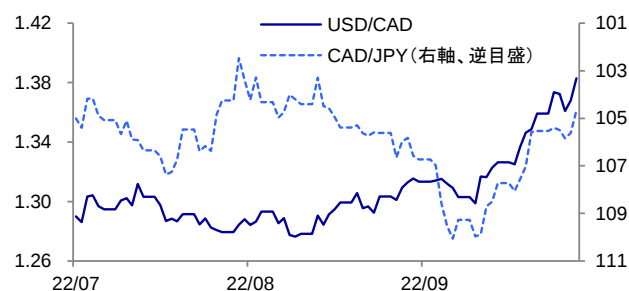
以上のことを考慮すると、FRBがインフレが低下していると確信を得て、FFレートのターミナルレートの具体的な水準が見えてくるまでは、USD高のトレンドは続くものと考えられ、USD/CADは1.40に向かっていく流れと予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のソーシャルメディア事情』
ここトロントでも、ソーシャルメディアは広く使われている。ソーシャルメディアの普及によって、大きく変わったことがあるとすれば、読書をする人の数が激減したこと。もう十数年前になりますが、トロントに来たばかりのころ、地下鉄に乗ると、読書をする人の数が多いことがすごく印象的でした。カナダ人の内省的なところは、こういった日々の読書からきているのか、と勝手に思ったりしました。慌ただしいソーシャルメディアからの情報を離れて、ゆつくりと本を読む時間も大切にしたいと思います。

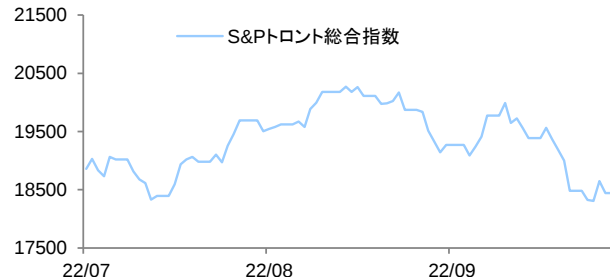
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	(資料) 予想	ブルームバーク 結果	ブルームバーク 前回
9/1	建築許可件数	7月	-0.40%	-6.60%	-0.60%
9/1	貿易収支	7月	3.78b	4.05b	4.88b
9/9	ネット雇用変化	8月	15.0k	-39.7k	-30.6k
9/9	失業率	8月	5.00%	5.40%	4.90%
9/14	鉱工業売上高 (前月比)	7月	-0.90%	-0.90%	-0.10%
9/16	住宅着工件数	8月	266.5k	267.4k	275.2k
9/20	CPI (前年比)	8月	7.30%	7.00%	7.60%
9/23	小売売上高 (前月比)	7月	-2.00%	-2.50%	1.00%
9/29	GDP(前月比)	7月	-0.10%	0.10%	0.10%
9/29	GDP(前年比)	7月	4.10%	4.30%	4.70%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW	1410	～	1470
KRW/JPY	9.804	～	10.204
JPY/KRW	9.800	～	10.200

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 中野 博文

■ 先月の為替相場

9月のドル/ウォン相場は歴史的上昇となった。8月31日にPBOCによるドル売り人民元買いと思われる動きもありドル/ウォンは一時的に下落していたことから、9月1日のドル/ウォンは1,342.0ウォンにてオープン。その後も週末の米雇用統計やECB(10/8)会合を前にした警戒感から、ドル/ウォンは上昇した。週が明けた後もECB会合(10/8)にて75bpの利上げが行われることへの警戒感から欧州金利を中心に上昇すると、ドル/ウォンはほぼ一直線で上昇。その後も水準感を好感した輸出勢のウォン買いにより、ドル/ウォンが若干押される局面も見られたものの、実需取引が一巡すると再び上昇し、7日には1,388.4をつけた。韓国の旧盆直前の8日海外時間にはECBが75bpの利上げを決定、さらにラガルドECB総裁が連続利上げを示唆したことから市場はユーロ買いドル売りとなり、連休明けの12日にドル/ウォンは若干下落したものの、13日海外時間には米8月CPI(結果:前月比0.1%、予想:同▲0.1%)が予想以上の結果になると、市場の一部にはインフレが落ち着くとの楽観的な見方があったことから米金利が急上昇し、ドル/ウォンも再上昇。その後は22日FOMCを前に、底堅く推移した。22日のFOMCでは大方の市場予想通り75bpの利上げ(上限:2.50%→3.25%)となるも、FOMC参加者による政策金利見通しは今年末に4.375%、来年末に4.625%となり、インフレ抑制のため来年も利上げが継続との姿勢が鮮明となった。さらにパウエルFRB議長の会見では利上げ継続と高い政策金利の維持の必要性が強調され、景気のソフトランディングは困難との姿勢も示されたことから、ドル/ウォンは節目の1,400を越えて上昇。さらに23日には英国政府による減税政策発表がインフレを悪化させるとの見方が広がり、英国債利回りが急騰すると韓国や米国の金利も毎日20bp近い大幅上昇を記録。かかる状況下、ドル/ウォンは27日に月高値1,442.2まで上昇した。27日海外時間に英中銀が英国債の無限買入を発表すると、市場は若干落ち着きを取り戻し、ドル/ウォンも若干調整。結局前月末比92.6ウォン高の1,430.2ウォンにてクローズ。

■ 今月の見通し

10月のドル/ウォンは底堅く推移する展開を予想する。

9月のドル/ウォンに影響する主な材料は以下の2点。

①インフレ推移と米FEDによる金融政策②BOKによる金融政策

①FOMC(9/22)では75bp利上げに加え、FOMC参加者による政策金利見通しが大きく上方修正されたほか、パウエルFRB議長は事実上ソフトランディングをあきらめる発言をした。さらに英国や欧州でのインフレが加速しており、各国の利上げ競争が激化しつつある。期待インフレを除けば、目先インフレが下がる可能性を示唆する材料に乏しいことから、FEDはインフレ抑制を最優先とした政策をとろう。

②BOKはドル/ウォン相場の安定化の観点から、米韓金利差を警戒しており、今後の韓国政策金利も米国次第との見方を示している。よって、8月BOK会合で示されていた政策金利見通し(22年末に3%程度)以上の利上げが予想される。しかしながら、韓国では不動産投資に紐づく貸出金利の急騰が世間で話題になっており、同様に金利負担から株式市場にも個人投資家の強制ロスカットが入る等、リスク性資産の市況は悪い状況だ。かかる中、外国人投資家による韓国買いは期待薄であり、政策金利の引き上げに関わらず、ウォン安を防ぐ手立てはないだろう。

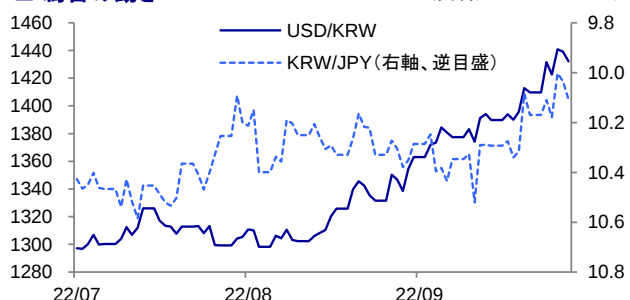
上記の状況を勘案すると、構造的なドル/ウォンの上昇は防ぎようがない印象だ。9月の急上昇に対する調整相場はあり得るほか、当局による為替介入は警戒すべきではあるものの、最終的にはドル/ウォンが高値を更新する展開が継続しよう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のソーシャルメディア事情』
当地のSNS事情ですが、日本と変わらずインスタが中心ですね。とにかく映える写真を撮ってアピールすることが大好きな韓国人はBBQ、プール、海など各種レジャーで映え写真を撮っています。先日家族と一緒に山に登った際にも、頂上には写真を撮るための若者の行列ができており、みんないける服装と決めポーズで思い思いの写真を撮っていました。いかにブランド品をかつこよく身につけるかは映えるための必須ポイントなので、韓国ではロゴが大きい服が好まれるのも、SNSでかつこよく映りやすいからだと思われます。その中で、日本メーカーのものも少なからずあり、陰ながら私も応援しております(日本では着にくいと派手な服も韓国では着やすいです)。お店のロコミもSNS上で簡単に手に入り、Google翻訳することで私たちもおいしい店を簡単に見つけることができます。皆さんがSNSで広がるネットワークを活かして、韓国旅行に来てくれると幸いです。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	GDP 確報値(前期比年率)	2Q	2.9%	2.9%	2.9%
9/1	輸出(前年比)	8月	5.6%	6.6%	8.7%
9/1	輸入(前年比)	8月	23.7%	28.2%	21.7%
9/1	貿易収支	8月	-8158M	-9470M	-5077M
9/2	CPI(前年比)	8月	6.1%	5.7%	6.3%
9/16	失業率	8月	3.0%	2.5%	2.9%
9/27	消費者信頼感	9月	-	91.4	88.8
9/29	景況判断(製造業)	8月	-	75	82
9/29	景況判断(非製造業)	9月	-	81	82
9/30	鉱工業生産(前年比)	8月	1.0%	1.0%	1.5%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 31.50 ~ 32.50
TWD/JPY 4.40 ~ 4.66

東アジア資金部台北室 柴田 裕央

■ 先月の為替相場

9月のドル/台湾ドルは上昇し、約5年8か月ぶりの台湾ドル安水準に

月初9/1は30.470でオープン。8月のジャクソンホール経済シンポジウムでのパウエルFRB議長の講演以降の米金利の上昇につれてドル/台湾ドルもじり高の展開に。米雇用統計の結果も悪くないとの見方からドル買いのサポート材料となり、ドル台湾ドルは9/7には30.9台まで上昇。

月央に入ると米8月CPIの発表を控えてレンジでの推移となっていたが、予想外に強い結果に利上げペースが加速するとの見方が強まり、ドル高株安の流れが加速。台湾加権指数が急落する中、ドル/台湾ドルは上昇し、9/14には31台に突入。一方、台湾ドル安が止まらない流れに対して輸出企業が様子見をしているため、実需ベースでしか取引の出来ない台湾ドルの買いフローが少ないことも台湾ドル安を加速させる要因となった。

月後半も外国人投資家の台湾ドル売りからドル/台湾ドルの上昇が続いた。FOMCの結果を受けてドルが全面高となると9/22には31.5台を抜けて31.6台まで上昇。輸入企業や個人投資家もドルを買い急ぎ、9/26には一時31.901まで急上昇し、約5年8か月ぶりの台湾ドル安水準に。しかし、四半期末の月末では様子見していた輸出企業がドルを買う動きも見られ、上値は押さえられ、31.8台で推移した。

■ 今月の見通し

10月のドル/台湾ドルは上値を追う展開を見込む。

9月は輸出企業が台湾ドル安を見込んで様子見したため、台湾ドル買いのフローが少なくなり、外国人投資家の台湾ドル売りが大きく相場に影響した。

なお、9月の台湾中銀の金融政策決定会合では前回6月と同様の0.125%の利上げと預金準備率0.25%の引き上げを決定。8月のCPIが前年同月比2.66%と2月以来の2%台に戻したものの、通年では3%台で推移しており、利上げ決定のサポート材料となった。但し、楊台湾中銀総裁は、会見で次回(12月)の会合については引き締め・据え置き・緩和いずれの可能性もあると発言しており、方向性は不透明である。一方、今回は全会一致とならず、一部の理事は不動産価格の上昇を理由に0.25%の利上げを主張し反対した。次回の会合にむけては、今後発表される議事録の内容を注視していかなければならない。

10月についても引き続き台湾ドル安の流れが続くと見込む。米金利の上昇に伴い、ドル全面高となる中、輸出企業のスタンスが変わらず台湾ドル安を想定してドル売りを控えるとすれば、台湾ドル安は続くであろう。また、輸出自体についても注意したい。世界的に消費者物価が上昇する中、最終製品が買い控えられ、在庫調整が進んでおり、台湾の輸出の伸びも鈍化している。8月の輸出受注は前年同月比2.0%と7月のマイナスからプラスに戻したものの、8月の輸出額は前年同月比2.0%と伸びが鈍化している。世界的な景気後退に入った場合、輸出の減少は避けられず、貿易黒字も縮小が想定さえるため、台湾ドル安材料となってくるであろう。今後の貿易動向にも注意したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のソーシャルメディア事情』

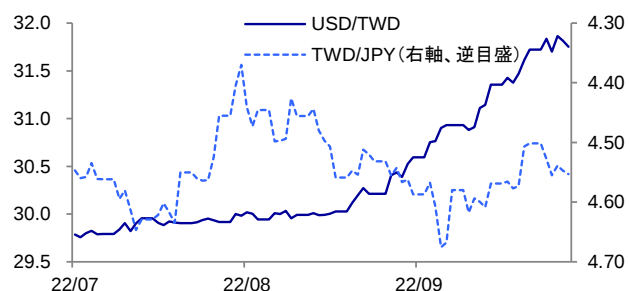
当地でのソーシャルメディアは日本とかなり近いです。個人間の連絡は、海外では珍しくLINEを使います。企業からの広告やお店の予約にも利用され、キャッシュレス決済も可能です。Facebookも個人だけではなく、お店が使っていることも多く、お店選びの参考にしています。なお、たまたま知り合った台湾人と交換するのはFacebookのIDのケースが個人的には多いです。

台湾的な話だと、Instagramですかね。「映え」文化が浸透しており、きれいなモノや自分を撮るのが好きな人が多く、かなり活用されているのではないのでしょうか。おススメの使い方とすると、地名で検索すれば、中国語が分からなくても写真でグルメや映えスポットが見つかるでしょう。

一方、異なるのがロコミサイト。Googleマップが活用されています。最近では日本もロコミサイトへの不信任感からGoogleマップに流れつつあると聞きますが、台湾はGoogleマップでの評価が重要です。台北の飲食店であれば、日本人のロコミもありますし、中国語もGoogleマップなら翻訳機能もあるため、日本人でも扱いやすいです。気を付ける点としては、日本よりも平均的に点が高いこと。また、お店によっては高評価してくれたらおまけしますと宣伝しているところもあるので、点数だけでなく写真やロコミも参考にしてください。

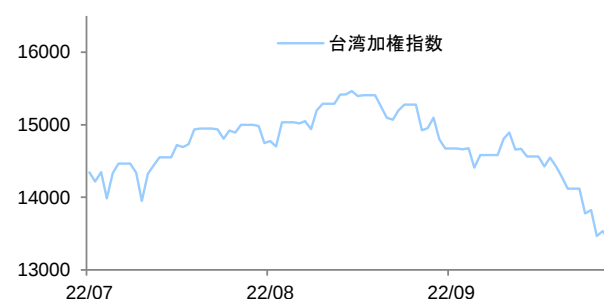
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/5	外貨準備高	8月	-	545.48B	547.81B
9/6	CPI(前年比)	8月	3.14%	2.66%	3.36%
9/7	輸出(前年比)	8月	11.6%	2.0%	14.2%
9/7	輸入(前年比)	8月	8.7%	3.5%	19.4%
9/7	貿易収支	8月	4.30B	2.99B	5.03B
9/20	輸出受注(前年比)	8月	1.1%	2.0%	-1.9%
9/22	失業率	8月	3.70%	3.67%	3.68%
9/22	公定歩合	2Q	1.625%	1.625%	1.500%
9/23	鉱工業生産(前年比)	8月	0.42%	3.68%	1.63%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.8400 ~ 7.8500
HKD/JPY 17.80 ~ 18.75

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【9月の香港ドル直物相場】

9月の香港ドル直物相場は、米国連邦準備理事会（FRB）が3会合連続で75bpの利上げを実施したことを受けて米ドル高圧力が強まり、ベッグ制の上限である7.85近辺まで値を戻した。一方で、短期の香港ドル金利は上昇したことから資本流出圧力は限定的となり、HKMAは米ドル売り/香港ドル買いの為替介入を出来る限り控えた様子だ。しかし、引き続き香港ドル安方向への圧力は根強い。米ドル買い/香港ドル売りのキャリートレードのフローは依然多いことに加え、足元の香港株式市場の軟調な値動きを受けて、IPO関連の香港ドル需要も依然低調だ。また、域内経済に目を向けると、香港政府は経済活動再開を求める圧力の強まりを受けて、ホテルでの強制隔離や事前のPCR検査撤廃等、入境規制の緩和に踏み切った。3日間の行動制限期間後に検査結果が陰性であれば、その後は飲食店にも制限無く入店することができる。しかし、中国を除き多くの国が既に渡航制限や入国制限を撤廃している中、今回の香港の緩和措置が特別多くの外国人観光客呼び込みに繋がるとは考えにくい。逆に、香港からの旅行者が増加することにより、域内消費の落ち込みを懸念する声も高まっている。

【9月の香港ドル金利市場】

9月の香港ドル短期金利は、四半期末を前に各年限で上昇した。香港ドルHIBORは1か月物で2.6%、3か月物で3.2%を超える水準まで上昇している。FRBによる9月FOMC会合での75bp利上げ決定を受け、香港の銀行は2018年以来となるプライムレートの引き上げ（12.5bp）を発表した。引上げ自体は予想通りではあったものの、引き上げ幅は市場予想よりも小幅に留まった。また、HKMAのアグリゲートバランスについては、米ドル売り/香港ドル買いの為替介入が小額に留まったことから安定的に推移した。一方で香港ドル短期金利は上昇しており、香港ドル建てHIBORと米ドル建てLIBORのスプレッドは、1か月物でマイナス70bpsからマイナス50bps、3か月物でマイナス50bpsからマイナス40bps近辺までそれぞれ縮小した。また、長期の金利に目を向けると、FRBの利上げ最終到達点が引上げられたことを受けて、先々の米金利上昇期待に連動して中長期金利についても上昇圧力が高まり、香港ドル5年物スワップ金利は14年ぶりの高水準となる4.30%近辺まで急上昇した。

■ 今月の見通し

【10月の香港ドル直物相場】

9月FOMC会合での75bp利上げ実施とタカ姿勢の継続を受けて、米ドル買い/香港ドル売りのキャリートレードを狙ったフローが一段と増加し、香港ドル直物相場は7.85近辺での推移が続くものと想定している。前回の利上げサイクルでは、HKMAのアグリゲートバランスは540億香港ドルまで減少したが、現在はまだ1,200億香港ドル近辺と比較的潤沢な水準を維持していると言える。当面はFRBの利上げが継続される中で香港ドル安圧力が続く流れは変わらないだろう。株式市場に目を向けると、香港の株式市場の先行きには引き続き弱気な見方が多い。米国の証券取引所における上場廃止リスクに備えた香港での上場を展望する中資系企業の動きはサポートになるものと思われるが、米監査当局による中国・香港企業の監査検証を容認する暫定合意が米中間で結ばれたことを受けて、ややリスクが後退している。その為香港株式市場への上場を目指す動きは以前ほど活発ではなく、IPO活動も低調な推移が続くものと思われる。その結果、香港への資金流入は引き続き限定的となり、米ドル高・香港ドル安圧力となり続けるだろう。

【10月の香港ドル金利市場】

香港ドル金利は、FRBによる連続した大幅利上げ実施を受け、米金利に追従する形で急上昇している。通常四半期末を越えた直後は資金需要の一段により短期金利が一時的に低下する動きが見られるが、米金利の上昇圧力が強い現状では、そうした季節性の金利低下幅も限定的になる可能性が高い。米ドルベッグ制の下、香港ドル短期金利は米ドル金利に連動する為（過去推移を見ても、香港ドルHIBOR3か月物は米国のFF金利誘導目標に連動する）、香港ドルHIBORは各期間で一段と上昇し、3か月物については年末までに4%に達する可能性があると考えている。香港の銀行はプライムレートの引き上げを開始したが、現在の上昇幅は12.5bpと市場予想対比小幅に留まっており、今後も段階的な引き上げが続くと予想されている。

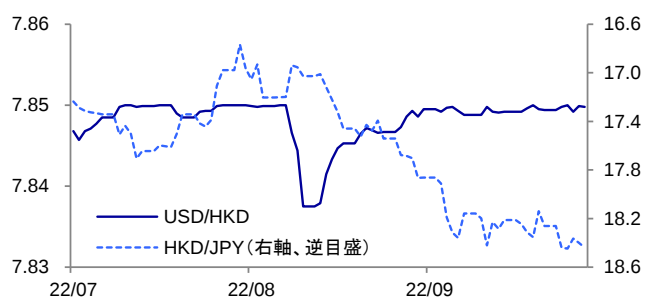
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『香港のソーシャルメディア事情』

香港では、ソーシャルメディアは幅広い層に活用されています。若年層の間で最も人気なのはインスタグラムです。インスタグラムでは、ストーリーや投稿を使ってお互いの近況を報告し合ったり、ダイレクトメッセージを送り合うことで様々な人とやり取りが出来ます。それに加えて、商業広告やショッピング機能での利用も一般的になりつつあるようです。個々の利用者の嗜好に合わせたターゲット広告が流れてくるので、それを元に皆ネットショッピングを楽しんでいます。また、香港人はフェイスブックもよく利用します。しかし、フェイスブックに関しては近況の報告ではなく、関心のあるお店や企業からの最新情報を得る為に利用することが多いです。また、様々なトピックに関するコミュニティに参加することもでき、焼売やミルクティーに関する地元のコミュニティの中には、かなり人気のものもあります。香港の人々はWechatやLINEも使っていますが、インスタグラムやフェイスブックと比べると、それほど利用者は多くありません。

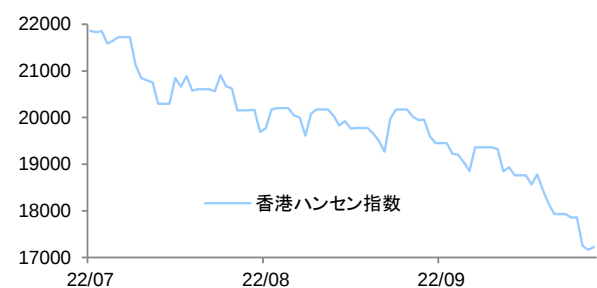
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/31	小売売上高(価額、前年比)	7月	1.4%	4.1%	-1.3%
9/5	S&P Global Hong Kong PMI	8月	-	51.2	52.3
9/7	外貨準備高	8月	-	\$431.8b	\$441.8b
9/14	鉱工業生産(前年比)	2Q	-	2.7%	-1.3%
9/14	PPI(前年比)	2Q	-	0.8%	2.3%
9/19	失業率(季調済)	8月	4.2%	4.1%	4.3%
9/22	CPIコンボジット(前年比)	8月	2.0%	1.9%	1.9%
9/26	輸出(前年比)	8月	-9.7%	-14.3%	-8.9%
9/26	輸入(前年比)	8月	-10.2%	-16.3%	-9.9%
9/26	貿易収支(HKD)	8月	-\$21.8b	-\$13.3b	-\$27.6b

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	6.9000	～	7.4000
	CNY/JPY	18.24	～	21.16
	100JPY/CNY	4.7300	～	5.4800

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 末吉 小絵

■ 先月の為替相場

9月のドル人民元(USDCNY)は年初来高値圏で急上昇後、月末に下落。

1日、6.91付近でオープン。PBOC仲値が市場予想対比で元高に設定されており、月初こそ上値重く推移していたものの、前週のジャクソンホール会合でパウエル議長が、景気はある程度犠牲にしてもインフレを優先する姿勢を強調していたことからドル高の流れは止まらず。

5日、6.91台半ばでオープン。国内のコロナ感染拡大に伴う一部都市での防疫措置強化を背景に元安が優勢の展開。同日夕方、PBOCは外貨預金準備率引き下げを発表。発表直後は一時的に元高へ推移したものの、6日オープン後、再びドル人民元は上昇し、7日午前中には6.98台へ上昇し年初来高値を更新。週後半にかけては元安の勢いは一服し、9日には一時6.91台へ下落。

中秋節明け13日は6.92台半ばでオープン。同日発表された8月米CPIが事前予想を上回ったことでドル高が進み6.97近辺まで急伸。15日には再びドル主導でUSDCNYは底堅い動きを続け、16日のオンショアオープンで2020年7月以来となる7台に乗せた。

19日、6.99付近でオープン。直後に7台を回復した後は底堅い推移となり21日には7.05台へ上昇。21日夜間のFOMCを受けて主要通貨に対してドルが上昇し、翌22日は7.08台でオープン。23日には7.10をつけた。

26日、取引開始時間直前にPBOCは外貨リスク準備金率を0%から20%に引き上げることを発表。外貨買いの事業法人にとって取引コストが増加することになるため元安抑制効果が期待できるものであるが、ドル高元安の勢いは止まらず、7.14レベルでオープンした後、正午前には6.1690まで上昇。当日の2%変動レンジ上限である7.1704が意識された。27日夜、PBOC仲値に逆周期因子を再導入との観測報道が見られたが元売りの勢いは止まらず、翌28日には7.20を突破し2%変動レンジ上限近辺である7.25前半まで上昇し高値を更新。同日夕方、「中国中銀、人民元の中心レートを尊重するように市中銀行に求める」とのヘッドラインが流れるも反応は一時的であったが、米金利が急低下する流れにドル人民元も下落。また、29日夕方には「中国人民銀、元安阻止へ国有銀に介入準備指示」とのヘッドラインが流れ、7.11台まで急落した。

■ 今月の見通し

10月のUSDCNYは下値を確認した後は再び底堅い動きを予想。

9月のUSDCNYは、7.25台前半まで上昇し、2008年1月以来の水準を付けた。月初の水準6.91台と比較すると3500Pips近くの上昇となった。

9月のUSDCNY上昇の背景は、ジャクソンホール会合や9月FOMCを受けて米国で利上げを進めていく姿勢が改めて示されたことが主因と考えられる。FED正常化のプロセスは暫く続くと思われるが、中長期的には利上げ終了の議論が開始されればドル高の流れはピークアウトすることとなる。

一方、中国サイドは急激な元安の流れに対し、外貨預金準備率引き下げ、外貨リスク準備金制度の再導入、連日のPBOC仲値の予想対比元高設定を実施。PBOC仲値に関しては逆周期因子導入の正式な発表はないものの、観測報道が見られている。月末にかけてPBOCによる元安抑制の動きが加速しており、国慶節前後で水準が大きく変動する動きには注意が必要である。

短期的には冒頭に記載した通り大きく進んだ元安について、元高調整が入ると考えられるが、不動産セクターをはじめとした中国経済の低迷や、それに伴い経済刺激策や「穏健な」金融政策を実施している環境は変わらないため元高調整後は再び底堅い値動きとなると予想する。

国慶節の終了後には共産党全国代表大会が10月16日より開催される。低迷する不動産市場への追加刺激策やゼロコロナ政策、貿易に関する新たな発言や動きがあるかどうかには注目したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のソーシャルメディア事情』

中国で生活する上でなくてはならないソーシャルメディアはWeChat(微信)です。基本的には日本のLINEと同じイメージで、国内でのチャットメッセージはWeChatを使ってやり取りしています。写真や動画をタイムラインに掲載することで友達同士で閲覧することもでき、Twitterと同じような機能もあります。

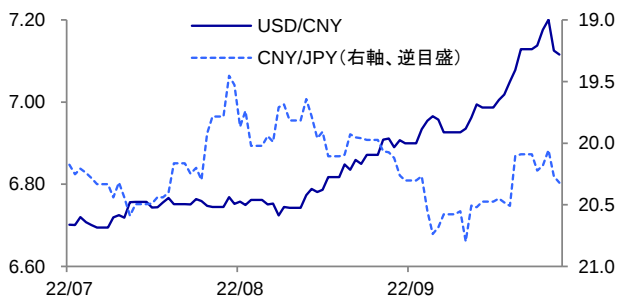
また、WeChat Payという電子決済機能はWeChatを使用しているユーザー全員が使っていると言っても過言では無い程中国全土で広く普及しています。お店やネット上での決済はもちろんのこと、個人間の送金も気軽にできるため、毎年春節の時期になると紅包(お年玉)のやり取りがWeChat上で行われたりもします。

日本のLINEをはじめとしたソーシャルメディアではあまり普及しておらず(私が使いこなせていないだけかもしれませんが・・・)、中国に来て便利だと感じるのは、WeChatのミニプログラム機能です。例えば、レストランに行き、座った席についているQRコードを読み取ると、WeChat内でそのレストランのアプリ(＝ミニプログラム)が立ち上がります。そこからメニューを選択して注文ができ、しかも会計もWeChat Payでノンストップとスマホ一つで全て完結することができます。

友人との交流だけに留まらず、生活に欠かせないツールとして大変重宝しています。

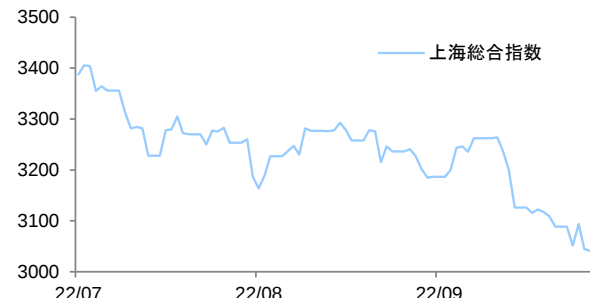
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	財新製造業PMI	8月	50.0	49.5	50.4
9/5	財新サービス業PMI	8月	54.0	55.0	55.5
9/7	貿易収支	8月	\$92.70b	\$79.39b	\$101.27b
9/9	CPI(前年比)	8月	2.8%	2.5%	2.7%
9/9	PPI(前年比)	8月	3.2%	2.3%	4.2%
9/16	小売売上高(前年比)	8月	3.3%	5.4%	2.7%
9/16	工業生産(前年比)	8月	3.8%	4.2%	3.8%
9/16	都市部固定資産投資(年初来/前年比)	8月	5.5%	5.8%	5.7%
9/20	1年物LPR	-	3.65%	3.65%	3.65%
9/20	5年物LPR	-	4.30%	4.30%	4.30%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3850 ~ 1.4620
SGD/JPY 97.00 ~ 108.00

アジア・オセアニア資金部 成田 隼基

■ 先月の為替相場

2022年09月のUSD/SGD相場はSGD安が進行。

月初よりSGDは軟調に推移。8月末より続く米金利上昇とUSD高の流れを引き継いだ格好。2日発表の米8月雇用統計では労働需給逼迫に緩和の兆しが見られ、米金利が低下する場面もあったが、5日にかけてSGDは総じて軟調推移となり、USD/SGDは1.40台に乗せた。その後もSGDは軟調に推移。6日発表の米8月ISM非製造業景気指数の上振れを受けて米金利上昇が加速。USD/SGDは8日にかけて1.41台まで上昇。

9日、SGDは小反発。ECB政策理事会やパウエル議長の講演等の注目イベントを通過し、リスクセンチメントがやや改善。アジア通貨は概ね堅調となり、USD/SGDは1.40台を割れた。その後は13日の米8月消費者物価指数の発表を控え様子見ムードとなる中、USD/SGDは1.39台の狭いレンジ内推移。実際に発表された米8月CPIの上振れを受けて、米金利は上昇し米株は大幅に下落。USDは急伸し、USD/SGDは再び1.40台を回復。その後はFOMCを控え警戒感が根強く、米金利がじり高となるなか、USD/SGDはじりじりと上昇し、17日には一時1.41台まで上昇した。

その後、20-21日に行われた米FOMCでは、FF金利の誘導目標レンジが2.25%～2.50%から3.00%～3.25%に75bp引き上げることが全会一致で決定された。付利(IORB)とON RRP金利もそれぞれ利上げ幅と同じ75bp引き上げられ、テクニカルな調整は行われなかった。この発表を受けて、米金利上昇、USD高の流れがより一層強まり、USD/SGDは大幅に上昇。28日にかけて一時1.44台後半の水準までUSD/SGDは急伸し、2020年3月以来の水準で推移している(29日現在)

■ 今月の見通し

2022年10月のUSD/SGD相場はSGD安の進行を予想。

足元のSGDは特に米国発の要因に大きく左右されており、同トレンドは暫く継続し、年末にかけて軟調推移が続く展開を予想する。

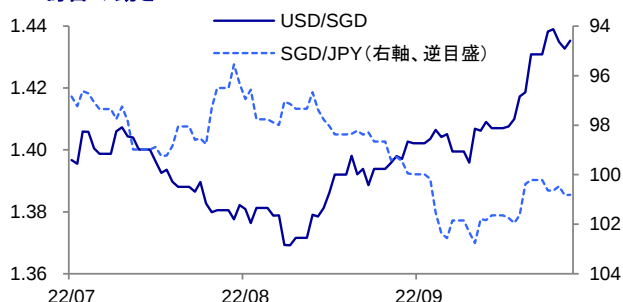
10月、シンガポールにおける大きなイベントとしてはMASの定例会合が予定されており、ここでは、4月の定例会合、7月の緊急会合に続き、更なる金融引き締めが行われると予想する。内容としては、前回の緊急会合時と同様の「SNEERの中央値引上げ」に加え、「SNEER傾斜の再調整(SGD高方向に1-1.5%程度)」という二つの調整を行うものと予想。

こうした決定により、SGDは幾ばくかではあるが、USDに対し水準を取り戻す可能性はあろう。しかし、タカ派傾斜を続け留まる気配が見られない米FRBの動向を鑑みるに、MASがいかん積極的な姿勢で強い調整(傾斜調整+中央値引き上げの両方)を行おうとも、その効果は一時的なものに留まり、2022年末にかけてSGD安が進行するという、これまで繰り返し論じてきた予想を変える要因にはならないだろう。

基本的なシナリオは、2022年末、及び2023年初頭にかけてUSD高トレンドが継続。MASによる政策変更はUSD/SGDのトレンドを変えるほどのインパクトを生むことはできず、SGD安の進行を若干和らげる程度に留まるというもの。具体的な水準としては、USD/SGDは一時的に1.46台後半、もしくは年末にかけてそれ以上の水準(1.48台)まで上値を試す可能性を見ており、2023年半ばにかけて徐々に水準を取り戻し、1.40台に向けた調整が行われると考えている。

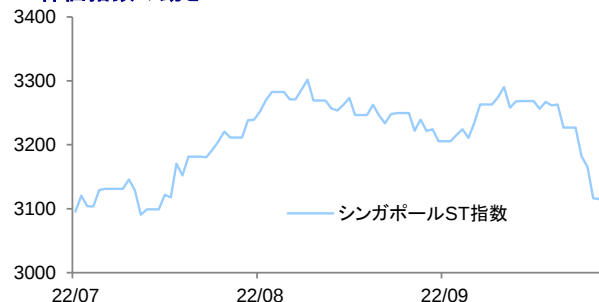
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/2	購買部景気指数	8月	50.0	50.0	50.1
9/5	小売売上高(前年比)	7月	11.7%	13.7%	14.9%
9/16	非石油輸出(前年比)	8月	8.3%	11.4%	7.0%
9/23	CPI(前年比)	8月	7.2%	7.5%	7.0%
9/26	鉱工業生産	8月	1.5%	2.0%	-2.1%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 37.40 ~ 38.90
THB/JPY 3.75 ~ 3.90

アジア・オセアニア資金部 パンコック室 鈴木 一勲

■ 先月の為替相場

9月は安値と高値が2バーツ弱も開き、バーツが大幅安。36.60台で9月を迎え、米大幅利上げ観測を背景にドル買い優勢。中国での感染者増加による規制強化も嫌気され、36.80レベルまで上値を伸ばすが、米8月雇用統計を前に上げ幅を縮小。発表された同指標は予想比強くなく、36バーツ半ばへ下落。5日のタイ8月CPIは約14年ぶりの高水準だったが、市場予想通りで影響は限定的。その後、予想を上回る米経済指標により36.80近辺へ上昇したが、米金利低下を横目に幅広くドルが売られて反落。ECBが0.75%の大幅な利上げを決定した他、パウエルFRB議長が改めてタカ派なスタンスを示すもドル高一服感が強く、36バーツ前半で推移した。

中旬、FOMCブラックアウト期間中の米8月CPIへの注目が強く、発表前は36.30前後をキープしていたが、同指標が予想を上回ると、ドル全面高。ドル金利の急騰もあって36.60台へ上昇。米8月CPI発表後は翌週のFOMCで100bp利上げも想定される中、バーツが近隣諸国の通貨安をリードする格好となり、15日には37バーツ近辺へ。16日には人民元が対ドルで約2年ぶり安値を示し、バーツもつられて2006年12月以来の37台へと上昇したが、大台に乗せた分だけ調整が入りやすく36.80台で越週。週明けはFOMCを警戒した米金利上昇やスウェーデン中銀の100bp大幅利上げによる、欧州債券安が米債に波及する格好で再び37バーツ台へ。

下旬、FOMCでの利上げ幅はコンセンサス通り75bpだったものの、メンバーが予想する今後の金利予想の中央値が前回(6月)から大幅に引き上げられ、パウエルFRB議長のタカ派会見を経ると、翌日には37バーツ台前半で堅調に推移。23日に英新政権が大型減税と国債増発を発表し、同国の財政悪化懸念から英国株、債券、通貨がトリプル安となり、これが波及してグローバルに金利が大きく上昇すると37バーツ後半へとバーツ安が加速。タイMPCを前にして他国比インフレ抑制が弱いと見られる25bp利上げを予想したか、MPC前に38バーツ台を示現。実際に25bp利上げが決定されるとタイ中銀の慎重姿勢が嫌気されて38バーツ半ばと高値を更新。月末にかけて英中銀が市場混乱沈静化のために債券買い介入を行い、一旦ドルバーツは37台後半へ沈んだが、ドル買い根強く29日のオンショアクローズでは再び38台を回復している。

■ 今月の見通し

10月のドルバーツ相場は16年ぶり高値圏をベースに底堅い推移を予想。9月を振り返ると、Fedの利上げスタンスに対する思惑を受けた米金利の上昇や英国発の市場の動揺に押される格好で38バーツ台と2006年6月以来の水準をつけている。こうしたドル強が際立つ環境下、対ドルで数年お十数年ぶりの安値を示す動きはタイバーツだけに限らないが、主要中銀の痛みを伴うインフレ抑制による景気減速懸念が付き纏うことで新興国へのインフローは引き続き抑制されると考えられ、10月にドルバーツがバーツ高に反転するタイミングを窺うには尚早といった感じがある。

タイ国内のインフレ抑制という観点では、10月から過去最大級の賃上げが実施されるため、労働者の所得水準が向上するも、これまでの物価上昇を埋め合わせるほどのインパクトは無く、今しばらくインフレ沈静化まで時間を要すると考えられる状況下で効果は限定的だろう。また、GDP比で高い家計債務比率や弱った国内経済に配慮して金融引き締めが周辺諸国比で出遅れ感が指摘されているため、タイ中銀の25bpの利上げもインフレ抑制の効果が乏しく、現状のペースでの利上げが維持される限りは相場へのインパクトが小さいと考える。加えて、タイバーツ買いを支える外国人観光客によるフローも当初想定よりは好調ながら、本丸の中国人観光客数の回復が見込めない中では伸張が期待できず、年末に向けてバーツ高への転換点を作る要素になるとは考えにくい。

外部環境としても、冒頭に記した通り主要中銀の金融引き締め継続に加え、欧州や中国の景気減速懸念、ロシアとウクライナの紛争長期化等不透明感満載の状況にあるため、タイバーツだけがこれらの要素から解放されることはないだろう。

よって、タイ政府や財務省が懸念している足許の通貨安がタイに限ったものではなく、タイのファンダメンタルズだけが原因とはいえない中、タイ中銀が投機的と判断して為替介入することは困難であるため、10月は16年ぶり高値圏をベースにした推移を予想。場合によっては39バーツをトライするという可能性もあると見ている。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のソーシャルメディア事情』

タイではソーシャルメディアを使う人が非常に多く、なんと世界の都市別比較でFacebookユーザー数が世界一らしいです！安いネット料金に加え、携帯電話は1人2台が珍しくないand1人で複数アカウント所有といった環境も世界一に貢献していると思います。

当地のソーシャルメディア活用方法としては、タイで一番人気のFacebookを例に挙げると、大きく2つ特徴があり、いずれもビジネスユースです。

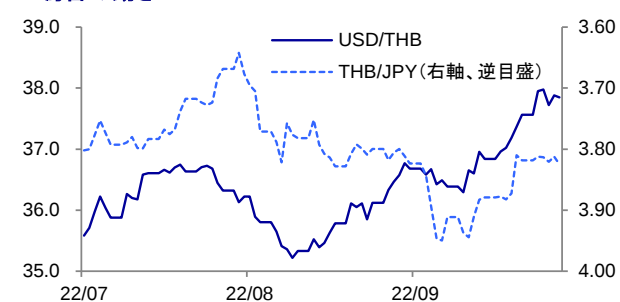
特徴1つ目は取引先とのコミュニケーションツールとしての使用です。問い合わせや顧客への連絡に使用するためFB Messengerが使われます。実際、私も当地で子供の自転車を購入する際、同機能を使って企業に問い合わせたことがあります。なお、企業同士でも使われるようです。

2つ目は広告媒体としての活用です。Facebook以外にもそうですが、使用していると商品広告が高い頻度で目につきます。ネットショッピングの感覚でソーシャルメディア経由で買い物をする人が多いようです。確かに、デパートに足を運ぶと店員さんがyoutuber顔負けの勢いで推しの商品をソーシャルメディアから配信している光景を見たことがあります。

上記のような使い方、特にビジネスでのコミュニケーションツールとしての使い方が日本でも広まったら、お取引先の方とのやり取りもすごく近い距離間になるかもしれないなと思った一方、個人アカウントの場合は設定しているプロフィール写真が無難なものに変えようとする方も多いかもしねえ。私は久しぶりに開いた自分のアカウントを見て、約10年前の写真が設定されていたのであの時若かったなあと思わしています。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/5	CPI YoY	8月	7.90%	7.86%	7.61%
9/5	CPI コア YoY	8月	3.24%	3.15%	2.99%
9/5	消費者信頼感指数	8月	-	37.8	36.4
9/22	自動車販売台数	8月	-	68,208	64,033
9/26	輸出(通関ベース) YoY	8月	7.70%	7.50%	4.30%
9/26	輸入(通関ベース) YoY	8月	17.95%	21.30%	23.90%
9/26	貿易収支(通関ベース)	8月	-\$3,044M	-\$4,215M	-\$3,660M
9/28	タイ中銀政策決定会合	-	1.00%	1.0%	0.75%

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.60	～	4.70
	MYR/JPY	30.77	～	31.75
	JPY/MYR	3.15	～	3.25

マレーシアみずほ銀行 内田 暎

■ 先月の為替相場

9月のリングgit相場はやや一方の展開となり、USD/MYRは98年アジア通貨危機以来のリングgit安水準を連日更新する展開となった。

上旬は4.48から4.50を挟む狭いレンジで動意に乏しい相場展開。前月26日のジャクソンホール会議講演の場でパウエル議長が利上げ継続に対して強い姿勢で臨むことを言及。以降8日のBNM政策会合や22日FOMCを控えて市場は様子見姿勢。一方、ドル円は金利差拡大懸念の円売りが続き140円を突破。その後も円売りの勢いは止まらず145円手前まで一気に上昇。MYR/JPYは2015年以来的の32円台に乗せた。8日のBNM政策会合では3会合連続で政策金利を25bp引き上げ。欧米主要国が大幅利上げに踏み切る中、BNMはインフレは管理可能であり利上げは段階的に実施する姿勢を示すと中旬以降のUSD/MYR上昇に繋がる流れとなった。

中旬は13日の米8月CPIでサービスや賃貸料上昇が牽引。ヘッドライン並びに食品エネルギーを除くコア指数がそれぞれ8.3%、6.3%と共に市場予想を上回る内容。発表後には一部100bp利上げを織り込む動きになるなど米国市場は波乱の展開。USD/MYRは4.52台を付け、EUR/USDも再びパリティ割れ。MYR/JPYは、日銀が介入準備でレートチェックと伝わると32円を上限に上値の重い展開となった。

下旬は22日FOMCが注目。FOMCのタカ派な結果を受けてUSD/MYRは4.6台に上値を伸ばした。注目のFOMCで利上げ幅は事前予想通り75bpながら、委員会メンバーの予想するFF金利見通しが大幅に引き上げられた点がドル買いを誘った。その後、同日ロンドン時間帯日銀がドル売り介入に踏み切る。USD/JPYが4円下落する中、MYR/JPYも一時31円割れ。但しその後は、介入効果も虚しく1週間経たずして145円手前、MYR/JPYは31円半ばまで戻した。国内では20日の8月貿易統計が、貿易最大相手国の中国向け輸出が他国比対比鈍化した点を除けば堅調。また23日には8月CPIが市場予想内ながら食品価格が牽引して前年比4.7%まで物価高が進行。発表後もUSD買い継続でUSD/MYRは4.6台に上昇した。

■ 今月の見通し

今月のリングgit相場は買戻し材料に不足する中、ドル買いに流れやすい展開を予想する。USD/MYRは既に歴史的なリングgit安水準に達している。次の安値目途は98年通貨危機時に付けた4.885となり、そこを上回ると過去最安値となる。現在の水準を踏まえると、すぐに到達する様なレベル感ではないものの、どの水準まで安値を目指すのか、またいつ頃ドルのピークアウトが来るのが市場の最大関心事項である。

但し、現在の状況はドル独歩高の裏返しであり、円、ユーロ、英ポンド、人民元などの主要通貨やインドネシア、タイなどのアセアン通貨と比較するとリングgitの下落幅は寧ろ限定的と言える。一例で示すと、年初来各通貨騰落率は対ドルでMYR:-9.4%、JPY:-19.7%、EUR:-18.2%、GBP:-27.0%、CNY:-11.8%、IDR:-6.2%、THB:-12.7%といった状況。MYRが下げ渋る背景を挙げるとすれば、主に①堅調な国内経済、②豊富な天然資源、③政府によるインフレ抑制と適切な金融政策 ④地政学的安定感 といった点になろう。(上記4点は相互に関連し合っている点は了承頂きたい) こういった要素が今後どのように変化していくかを見ると今後の相場を見通す上で手掛かりになると考えている。

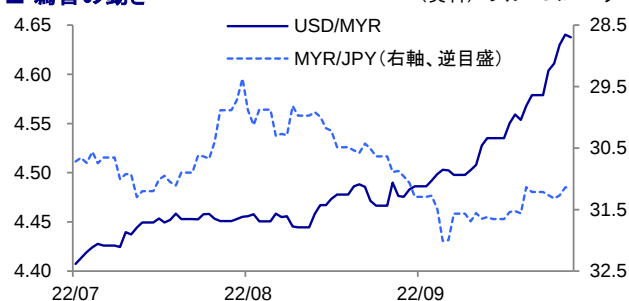
マレーシア経済は、比較的安定的に推移する貿易黒字と民間消費に支えられており、直近の統計でも力強い成長を見せている。また天然ガスや原油といった資源は更なる一段高を期待できる状況ではない一方、需給面での大きな崩れ、そして金融政策や地政学的安定感がドラスティックに変化するシナリオは限定的であり、寧ろ引き続きマレーシア経済の支援材料として作用すると見ている。かかる状況下ドル利上げ見通しが一服したタイミングでは、やや行き過ぎ感の否めないドル高に対して巻き戻しが入ると考えるのは自然な流れだろう。国内では10/7政府予算発表以外に特段目立ったイベントが無い中、巻き戻しのタイミングが来るまでの間、MYRの辛抱強さを試すマーケットは続くであろう。

■ 今月のつづき(現地からの声)

『当地のソーシャルメディア事情』
当地で一番メジャーなソーシャルメディアツールと言えば、WhatsAppだろう。アジア圏の他の国でもお馴染みかもしれないが、当地ではレストラン・病院・その他施設の予約にも幅広く使われている。ところで、このWhatsAppだが、当地の方の特徴としては、①略語の多用②音声入力機能の多用 が挙げられると感じている。①については、日本人的には未だ慣れない、頭文字をとった略語から、そもそもそれ略する必要あるの、ということとところまで幅広い。頭文字をとった略語といえば、コロナ期間中よく聞いたSOP(Standard Operating Procedure)、から簡単なところでKL(Kuala Lumpur)等々。銀行関連でいえばBNM(Bank Negara Malaysia)等もよく聞くが、そもそも知識がないとわからない略語も散見される。また、Whatのことを略してwatと書いたり、Thatをtatと書くため、You need to comply that SOP in KLとか言われてしまうと全く意味が分からない。なお、ローカルは元の単語を確り理解して会話をしているか、と言えば、どうやらそうでもなく、「なんとなく」というのが一番多いようだ。②については、特に中華系マレーシア人の間で一般的に用いられる。自分が伝えたい音声を録音し、それを送るというもの。わざわざ文字をタイプするのが面倒くさいという理由から、音声吹込みを行う模様。面白いのが、大体同じ母語同士の会話では、この方法が用いられるところ。何往復もしているところを見ると、だったら電話したほうが早いのでは、と思うが、そこは違うらしい。色々と不思議なところはあるが、他民族、多言語の当地においては、全員が等しく内容を簡単に理解するためには、電話よりも内容が確実で、メールよりもカジュアルなWhatsAppは生活必要不可欠なツールであり、今後も幅広く用いられることになるだろう。

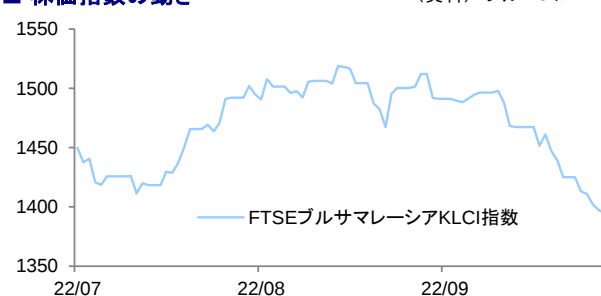
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/7	Foreign Reserves	Aug 30	-	\$108.2b	\$110.9b
9/8	BNM Overnight Policy Rate	Sep 8	2.50%	2.50%	2.50%
9/9	Industrial Production YoY	Jul	15.2%	12.5%	12.1%
9/20	Exports YoY	Aug	34.3%	48.2%	38.0%
9/20	Imports YoY	Aug	48.0%	67.6%	41.9%
9/20	Trade Balance MYR	Aug	15.05b	16.92b	15.49b
9/23	CPI YoY	Aug	4.7%	4.7%	4.4%
9/23	Foreign Reserves	Sep 15	-	\$106.3b	\$108.2b

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 15000 ~ 15500
 IDR/JPY 0.94 ~ 0.98
 JPY/IDR 102.04 ~ 106.38

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 田才 雄

■ 先月の為替相場

9月のドルルピアは上昇。(ルピアは対ドルで下落)
 月初、14800台半ばで取引を開始したドルルピアは米利上げ観測が強まる中、米金利が上昇したことを受け対ドルで軟調に推移。この日発表されたインドネシア8月消費者物価指数は、前年同月比で4.69%増となり、前月からやや低下し、市場予想の4.90%増を下回ったが、為替への影響は限定的となった。3日、前週末に発表された米8月雇用統計の結果を受けドルが堅調に推移する中、ルピアは対ドルでの下落幅を拡大させ14900台まで上昇。週明け5日、ロシアがノルドストリーム1を通じて欧州へのガス供給を無期限で停止したことや中国の新型コロナウイルス規制強化を受けて、リスク回避姿勢が強まる中、アジア通貨が全般的に円えない動きとなり、ルピアも上値重く14900台前半で推移したが、翌6日には証券投資の海外資金流入に支えられルピアは14800台後半まで反発し、底堅く推移。7日には米連邦準備理事会(FRB)が積極的な引き締めを継続するとの見方が強まる中、米国債利回りが上昇したことに連れてドルルピアも上昇(ルピアは下落)し、再度14900台前半で推移となったが、徐々にドル高の調整が入りアジア通貨が反発する中、ドルルピアも下落(ルピア高)となり、14800台前半までルピアは値を回復し、翌週12日まで同水準で推移。13日に発表された米8月CPIの結果が予想を上回ったことを受けて、米金利が急騰、ドル高の流れとなる中、ドルルピアも反発し14900台前半まで再度上昇。翌14日にはインドネシアの8月貿易収支が発表され、市場予想を上回る57億ドル超の黒字を記録したことを受けてドルルピアは一時14900を割り込むも、米8月CPI発表後から続く米金利上昇、ドル高の流れを受けドルルピアは上昇に転じ14900台を回復し上昇幅を拡大。その後もFOMCを控えドル買いが進展する中、ルピアも軟調な推移を継続し15000台に乗せる。アジア時間22日に発表されたFOMCの結果はタカ派色の強い内容を受け止められドル高が一段と進展。ドルルピアは15000台前半から半ばで推移。同日発表されたインドネシア中銀政策決定会合の結果は、サプライズの50bpの利上げとなった。インフレ抑制とルピア防衛の観点からの利上げで、主要政策金利の7日物リバースレポレートは4.25%へと引き上げられることとなった。しかしサプライズにもかかわらず、ルピアの上値は重く、15000台前半を中心とした推移が継続。26日、英ポンドが財政悪化懸念から対ドルで下落したことを受け、リスク回避的な値動きとなる中ルピアも下落し。ドルルピアは上昇幅を拡大させ、月末にかけては15200台まで上昇してクローズ。

■ 今月の見通し

10月のドルルピアは堅調な推移を予想。(ルピアは対ドルで軟調と予想)
 9月発表されたインドネシア8月貿易収支は市場の事前予想を大きく上回る57億ドル超となり、引続き堅調に推移していることが確認された。加えて、8月会合において25bpの利上げに踏み切ったインドネシア中銀だが、ペリー総裁は「FRBのような積極的な利上げは予想すべきでない」とコメントしていたにも関わらず、9月会合において50bpの利上げを実施。貿易収支・金融政策等のルピア高に影響する材料があったにも関わらず9月ルピアが軟調に推移した背景には米利上げ及び欧州に端を発する景気の先行き不透明感が影響しているものと考えられる。
 米インフレが高止まりする中、利上げ期待の高まりからドル高が進む流れに変化は無く今月もドル高が進みやすい環境になると考えるのが自然か。加えて英財政への懸念や欧州におけるライン川推移低下によるエネルギー供給懸念など、欧州の景気先行きに対する懸念は直ちに解消する類の材料ではなく、リスク回避的な流れを受けアジア新興国通貨も売られやすい地合いが継続するものと考えらる。ドルルピアもドル高・アジア通貨安の流れを受け上昇するものと予想。
 しかしながら、インドネシアに関しては貿易収支が改善していること、アジア諸国の中でも利上げ余地も相応にあることから、他のアジア通貨対比では売られにくいと考える。インドネシアの主要輸出品目である石炭の価格もピークアウト感は見られず、高値圏での推移が継続しており貿易黒字の拡大も維持されると見込まれる中、国内のファンダメンタルズの観点からは他のアジア通貨対比で売られやすい通貨とはなりにくいだろう。実際にアジア主要通貨の9月の対ドル騰落率を見ても香港ドル、シンガポールドルに次いで下落率が低くなっており、10月もこの流れが継続しよう。
 以上、10月のルピアは、外部要因を主因として上昇すると考えるものの、国内ファンダメンタルズを踏まえ下落幅は他のアジア通貨対比限定的となるものと予想する。

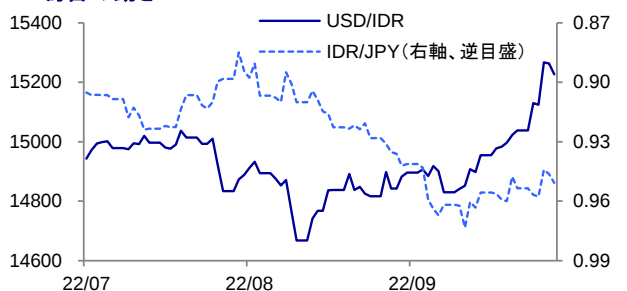
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のソーシャルメディア事情』
 当方で2大人気ソーシャルメディアはWhatsApp、YouTubeです。
 全世界で20億人ものユーザーを抱える大人気のチャットアプリなWhatsAppですが、老若男女問わず、家族や友人とのコミュニケーション手段となっています。さらには、電話番号とアカウントが直結していることもあり、仕事や学校関連でも頻繁に利用されています。ビジネス面では、ユーザーと企業が双方向のやり取りができる場ともなっています。企業のWhatsAppアカウントを通してサービスの告知を行ったり、お問い合わせにも対応したりなど、顧客育成の面では欠かせないツールとなっています。
 動画共有プラットフォーム大手のYoutubeにおいて、とある調査では過去3か月でYoutubeをアクセスする人は約87%となり、Facebookの75%やInstagramの79%を上回りました。人気のコンテンツは映画や音楽で、子供の間では最近ゲームのストリーマーが人気が高いです。ストリーマーとは、ゲームのプレイ実況や解説動画を配信する人のことを言います。他人のゲームのプレイを見て、何が楽しいかと思いかもしれませんが、意外と面白いです。

(インドネシアみずほ銀行 アストリッド)

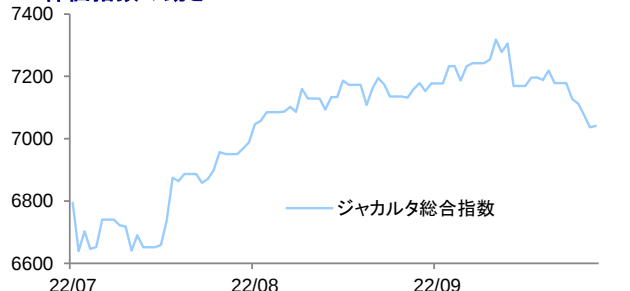
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	CPI(前年同月比)	8月	4.87%	4.69%	4.94%
9/15	貿易収支(USD M)	8月	4,000m	5,760m	4,220m
9/15	輸出(前年比)	8月	19.90%	30.15%	44.32%
9/15	輸入(前年比)	8月	31.55%	32.81%	41.22%
9/22	BI 7daysリバースレポ金利	-	4.00%	4.25%	3.75%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 57.00 ~ 62.00
JPY/PHP 0.395 ~ 0.42

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榎 雄一郎

■ 先月の為替相場

フィリピンの8月の製造業PMIが51.2と前回の50.8から改善を見せたが、中国のロックダウンによる景気減速懸念、FRB高官によるタカ派発言や米経済指標の底堅い結果を受けた米大幅利上げ継続観測から、ドル上昇となるなか、ペソは2日には2004年9月27日につけた1米ドル＝56.450ペソの最安値を更新し、1米ドル＝56.770ペソまで下落。その後も欧州エネルギー危機等、センチメント悪化の流れが継続し、アジア通貨は軟調な展開となるなか、フィリピン中銀のメダラ総裁がペソ安のインフレへの影響について懸念を示すも、積極的な利上げについて言及しなかったことや7月の貿易赤字が過去最大を更新したことから、ペソは節目の1米ドル＝57.000ペソを割り込むなど、上旬にかけては一段安となった。

その後は米消費者物価指数の発表を控えて、様子見ムードが強く、1米ドル＝57.000ペソを挟んでの動向の乏しい展開が続き、米インフレがピークに近づいているとの観測からドル下落となる局面も見られたが、8月の米消費者物価指数が予想を上回る伸びを示し、米利上げ織り込みが加速したことを背景に、ドルが広範囲に買われる展開となった。また、フィリピン中銀による経常赤字拡大見通しがペソ下押し材料となったほか、FOMCを控えて、タカ派警戒感からペソは連日の安値更新となり、1米ドル＝58.000ペソまで下落した。

22日には予想以上にタカ派となったFOMCの声明文・政策金利見通しやパウエル議長の記者会見を受けて、ドル大幅上昇となり、ペソは1米ドル＝58.500ペソまで下落。その後、フィリピン中銀は大方の予想通り、50BPの政策金利引き上げとなったが、ペソへの影響は限定的となった。フィリピン中銀のメダラ総裁が介入強化も検討していると述べたほか、フィリピンは金融引き締めには耐える余地があるとし、米当局動向次第ではあるものの、更なる利上げを示唆も、トレンド転換には至らず、英国市場の混乱や世界的なリセッション懸念からペソは下落ペースを加速させ、連日の安値更新となり、1米ドル＝59.000ペソまで下落する展開となった。

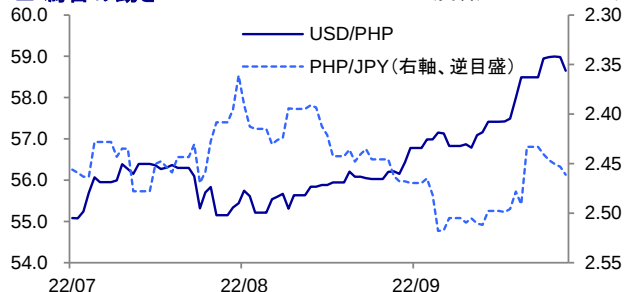
■ 今月の見通し

FOMCでは声明文・政策金利見通しやパウエル議長の記者会見が想定以上にタカ派なものとなり、インフレ抑制の為に経済成長や雇用を犠牲にしても断固として引き締めを続けるという、FEDのスタンスが確認された。積極的な米金融引き締め継続から広範囲なドルの強さが今後も継続する可能性が高く、加えて、フィリピン経済活動回復による輸入増加と国際商品価格上昇を受けて、経常赤字が拡大するとの見通しもペソ下押し材料となり、ペソ下落トレンドは継続する可能性が高い。また、米利上げを受けて経済のソフトランディングの可能性が低くなりつつあるなか、センチメント悪化やそれを受けたリスクアセットの大幅調整からペソは更に下げ足を早める局面も想定される。

一方、フィリピン中銀はデータ次第であるものの、インフレ抑制のためにあらゆる必要な措置を講じる用意があり、また、経済は金融引き締めにも耐える力強さがあるとの見解を示しており、米国の更なるタカ派化やペソ安に対応するために、今後も積極的な引き締めを行う可能性が高まっていることがペソのサポートと考えられる。また、当局による介入強化や原油価格の下落基調や海外在留労働者からの送金需要が高まる季節性といった要素もペソ安圧力の一部緩和材料となろう。

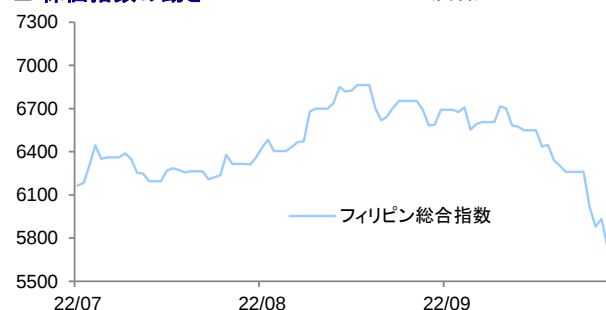
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク
期間 予想 結果 前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 78.50 ~ 83.00
INR/JPY 1.73 ~ 1.84

アジア・オセアニア資金部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【9月の米ドル/インドルピーは史上最高値を更新した】

79.52で1日取引を開始。中国のコロナ感染再燃から人民元相場が1ドル=6.95元の節目をブレイクして元安進行、アジア通貨全般を重くした。またロシアのガスパイプラインのストップからユーロと英ポンドが売られる展開にドルが選ばれ、ドルインデックスは20年ぶりとなる110を超え、ドル高が肯定される展開。かかる中、ルピーも減価が予想されたがインド当局がドル売り為替介入の効果によって、1ドル=80.00ルピーを前にルピー安が抑え込まれる格好。当時に原油価格が今年2月以来ではじめてとなる90ドル割れまで下落したこともルピーにとって支援材料に。

2週目に入ると新興国ファンドがゼロコロナ政策を行っている中国のエクスポージャーを落としているとの話題にこれらの資金の一部がインドに流入しているとの観測でセンセックス株式指数が6万台を回復。外国人投資家のルピー買いが意識される。12日マーケットクローズ後に発表されたインド消費者物価指数が事前予想を超えるインフレを示すと更なる政策金利利上げが肯定される展開。またJPMorganのグローバルインデックスにインド国債が組み入れられるとの予想を米銀が発表、これに伴い300億ドル程度の投資資金が流入するとの噂が流れると為替ではドル売り/ルピー買いが先行、13日には当月安値となる79.02まで急激に下落。ただ、同日夜に米物価指標が予想を上回る内容となると、大きくドル高に傾倒し79台後半に。また人民元が心理的節目であった1ドル=7円を突破して元安に。アジア通貨全般に向い風となった。

3週目に入るとブーチン露大統領が予備役の戦地動員の大統領令を出したほか、利上げ期待からドル高が進行するとFOMC前にドル/ルピーは大台80を超える。迎えたFOMCはタカ派と捉えられ、翌日22日には80.875まで急激なドル高/ルピー安が進行。23日も勢いは衰えず81.245まで上値を切り上げて越週。

4週目は混乱するイギリスを背景としたリスクオフが話題。81.55で月曜取引を開始。81.50レベルでインド中銀のドル売り介入が聞かれたがドル高の勢いは衰えず、米10年国債利回りが4%をつけると28日には当月の高値となる81.95まで上伸し、新たな史上最高値に。29日執筆時点では81.86で15時半を迎えた。

■ 今月の見通し

【10月のドル/ルピーは高値圏での推移を想定】

8月に続き、9月の相場についても前月本欄に記載した内容通りの相場展開になっており、10月についても基本的な材料は不変だと思っている。

話題に挙がることが多いインド当局のドル売り為替介入の動きについて見れば、9月序盤は80.00を前に断続的に介入を行い、79台を維持。その後FOMCを経て大きくドル高に振れる場面でしっかりとドル売りを行ったイメージで結局月間を通してドル売りを出した。入手できる最新のデータとして、7月は単月でスポット市場において190.5億ドルのネットドル売りを出していることが確認されている他、9/16週には外貨準備高が5456.5億ドルまで減少、2020/10/2以来の水準に。これについて9月月初に公表されたRBIのレポートにおける試算では現水準の外貨準備はインドの輸入代金の9か月分に等しいと表現した。一般的によく言われる3か月分までは距離があり、「やろうと思えばまだできる」というのが正直なところだろう。ただ、本邦財務省が9月に3.6兆円分の介入を行った後のドル/円を見れば明らかに、為替介入はバッファになることはできても相場の方向を変えることはできないという点には留意が必要だろう。併せてインドの貿易収支を見れば、今年1月から8月までの赤字総額は1854億ドル。平均で毎月232億ドルの赤字となることを勘案すれば190億ドルの為替介入を行ったとしても単純にはルピー安にならない点は明白だろう。

9月30日に公表されるインド中銀政策会合では0.35%または0.50%の利上げがコンセンサス。また注目は①物価見通しが上方修正されるか？②成長率見通しが下方修正されるか？だろう。FRBと同じく今回の一連の利上げの終点は何%になるのか、という「ターミナルレート」を探る意味で利上げ幅も重要だが、インド中銀の景気見通しがどうなるのか注視したい。

10月のドル/ルピー相場は上昇トレンド継続を基調シナリオに。ただ、FOMCを一旦通過したことから9月最終週のように大きな幅で従来の高値を更新していくには材料不足であり、現状高値圏での推移という表現にとどめたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のソーシャルメディア事情』

ソーシャルメディア利用者の先駆者がインドのモディ首相。2014年のインド首相就任前の2009年からTwitterを利用し、現在も国民や有権者との新たなコミュニケーションをしています。

ソーシャルメディアユーザーは、国民の4割の5億人(都市部は6割、田舎部3割というところでしょうか。)とされていますが、年々拡大している市場であることを考えると首相の影響もあり、年々ユーザー数が増えています。

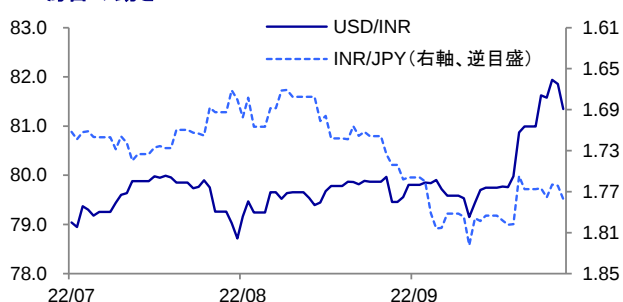
多様なソーシャルメディアがあるなか、インドでもYouTube、Facebook、Twitter、Instagram、また、多言語多宗教国家のインドならではのKooも人気。Kooは、インド版ツイッターで、現時点で10個の言語に対応し、地域の現地の言語でアイデアや意見の共有が可能です。また、インドではまだお見合い結婚というイメージがありますが、私がインドの地方都市を旅行中に、ソーシャルメディアで知り合い、結婚したという夫妻にも出会いました。

ソーシャルメディアが大衆に浸透してくるにつれ、多様なニーズに対応するデジタルのプラットフォームやビジネスが誕生し、もしかしたら日本以上に、ソーシャルメディアはインドの市場戦略・ネットワーク作りに欠かせないものになっているのかもしれない。

※1 WhatsApp: 日本でのLINEのようなメッセージアプリで電話番号とアカウントが直結し、世界に15億人のユーザーがいます。

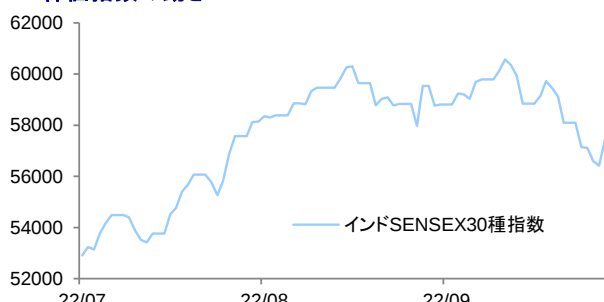
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	製造業PMI	8月	-	56.2	56.4
9/12	CPI	8月	6.90%	7.00%	6.71%
9/12	鉱工業生産	7月	4.2%	2.4%	12.7%

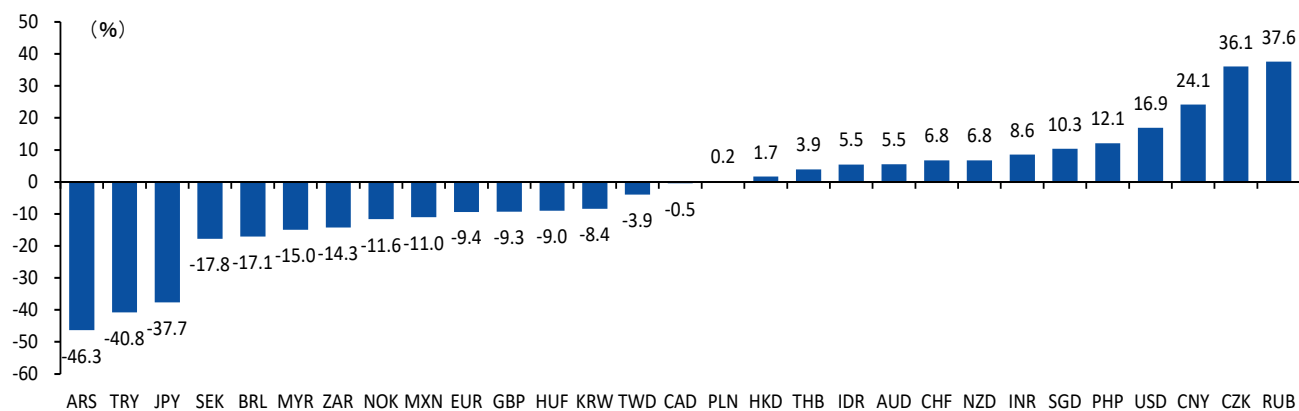
(資料) ブルームバーク

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2021年末	2022年9月末	騰落率	株式市場	2021年末	2022年9月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	36338.3	28725.51	-20.9%	-
日本	USD/JPY	115.08	144.74	25.8%	日経平均株価	28791.71	25937.21	-9.9%	-28.4%
ユーロ圏	EUR/USD	1.137	0.9802	-13.8%	ドイツDAX指数	15884.86	12114.36	-23.7%	-23.7%
英国	GBP/USD	1.3532	1.117	-17.5%	ロンドンFTSE100指数	7384.54	6893.81	-6.6%	13.1%
豪州	AUD/USD	0.7263	0.64	-11.9%	S&P/ASX200指数	7444.642	6474.198	-13.0%	-1.3%
カナダ	USD/CAD	1.2637	1.3829	9.4%	S&PTロント総合指数	21222.84	18444.22	-13.1%	-20.6%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.3561	7.1159	12.0%	上海総合	3639.775	3024.39	-16.9%	-25.8%
香港	USD/HKD	7.7966	7.8498	0.7%	香港ハンセン	23397.67	17222.83	-26.4%	-26.9%
インド	USD/INR	74.3375	81.3488	9.4%	インドSENSEX30種	58253.82	57426.92	-1.4%	-9.9%
インドネシア	USD/IDR	14263	15227	6.8%	ジャカルタ総合	6581.482	7040.798	7.0%	0.2%
韓国	USD/KRW	1189.88	1432.12	20.4%	韓国総合株価	2977.65	2155.49	-27.6%	-39.9%
マレーシア	USD/MYR	4.1665	4.6375	11.3%	ブルサマレーシアKLCI	1567.53	1394.63	-11.0%	-20.1%
フィリピン	USD/PHP	50.992	58.65	15.0%	フィリピン総合	7122.63	5741.07	-19.4%	-29.9%
シンガポール	USD/SGD	1.349	1.4353	6.4%	シンガポールST	3123.68	3130.24	0.2%	-5.8%
台湾	USD/TWD	27.674	31.753	14.7%	台湾加権	18218.84	13424.58	-26.3%	-35.8%
タイ	USD/THB	33.211	37.847	14.0%	タイSET	1657.62	1589.51	-4.1%	-15.9%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2022年8月時点)



■ 実質GDP成長率

	2020Q4	2021Q1	2021Q2	2021Q3	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2020	2021
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	3.9	6.3	7.0	2.7	7.0	-1.6	-0.6	-2.8	5.9
日本*	6.7	-1.3	1.5	-1.8	3.9	0.2	3.5	-4.7	1.8
ユーロ圏	-4.1	-0.8	14.4	3.7	4.6	5.4	4.1	-6.1	5.2
英国	-6.3	-5.0	24.5	6.9	6.6	8.7	2.9	-9.3	7.4
豪州	-0.7	1.5	9.8	4.1	4.5	3.3		-2.2	5.0
カナダ*	9.1	4.4	-3.1	5.3	6.6	3.1	3.3	-5.2	4.7
エマージングアジア									
中国	6.4	18.3	7.9	4.9	4.0	4.8	0.4	2.2	8.1
香港	-3.6	8.0	7.6	5.4	4.7	-3.9	-1.3	-5.9	7.2
インド	0.7	2.5	20.1	8.4	5.4	4.1	13.5	6.8	6.5
インドネシア	-2.2	-0.7	7.1	3.5	5.0	5.0	5.4	-2.0	3.7
韓国	-1.1	2.3	6.3	4.1	4.4	3.0	2.9	-0.7	4.1
マレーシア	-3.3	-0.5	15.9	-4.5	3.6	5.0	8.9	-5.6	3.1
フィリピン	-8.2	-3.8	12.1	7.0	7.8	8.2	7.4	-9.5	5.7
シンガポール	-0.9	2.0	15.8	7.5	6.1	3.8	4.4	-4.1	7.9
台湾	5.3	9.2	7.8	4.4	5.3	3.7	3.1	3.4	6.6
タイ	-4.2	-2.4	7.7	-0.2	1.8	2.3	2.5	-6.2	1.5

(注) インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	22/01	22/02	22/03	22/04	22/05	22/06	22/07	22/08	2020	2021
	(%)								(%)	
先進国										
米国	4.0	3.8	3.6	3.6	3.6	3.6	3.5	3.7	8.1	5.4
日本	2.8	2.7	2.6	2.5	2.6	2.6	2.6	2.5	2.8	2.8
ユーロ圏	6.9	6.8	6.8	6.7	6.7	6.7	6.6		8.0	7.7
英国	4.0	3.8	3.7	3.8	3.8	3.8	3.6		4.5	4.6
豪州	4.2	4.0	3.9	3.9	3.9	3.5	3.4	3.5	6.5	5.1
カナダ	6.5	5.5	5.3	5.2	5.1	4.9	4.9	5.4	9.6	7.4
エマージングアジア										
中国									4.0	3.9
香港	3.9	4.5	5.0	5.4	5.1	4.7	4.3	4.1	5.5	5.4
インドネシア		5.8							6.0	6.4
韓国	3.6	2.7	2.7	2.7	2.8	2.9	2.9	2.5	4.0	3.7
マレーシア	4.2	4.1	4.1	3.9	3.9	3.8	3.7		4.5	4.6
フィリピン	6.4	6.4	5.8	5.7	6.0	6.0	5.2		10.4	7.8
シンガポール	2.3	2.1	2.2	2.2	2.2	2.1			3.0	2.7
台湾	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.9	4.0
タイ			1.5			1.4			1.7	

(資料) ブルームバーグ、Macrobond、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	21/12	22/01	22/02	22/03	22/04	22/05	22/06	22/07	22/08	2020	2021
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	7.0	7.5	7.9	8.5	8.3	8.6	9.1	8.5	8.3	1.2	4.7
日本	0.8	0.5	0.9	1.2	2.5	2.5	2.4	2.6	3.0	0.0	-0.3
ユーロ圏	5.0	5.1	5.9	7.4	7.4	8.1	8.6	8.9	9.1	0.3	2.6
英国	5.4	5.5	6.2	7.0	9.0	9.1	9.4	10.1	9.9	0.9	2.6
豪州	3.5			5.1			6.1			0.9	2.9
カナダ	4.8	5.1	5.7	6.7	6.8	7.7	8.1	7.6	7.0	0.7	3.4
エマージングアジア											
中国	1.5	0.9	0.9	1.5	2.1	2.1	2.5	2.7	2.5	2.5	0.9
香港	2.4	1.2	1.6	1.7	1.3	1.2	1.8	1.9	1.9	0.3	1.6
インド	5.7	6.0	6.1	7.0	7.8	7.0	7.0	6.7	7.0	6.6	5.1
インドネシア	1.9	2.2	2.1	2.6	3.5	3.6	4.4	4.9	4.7	2.0	1.6
韓国	3.7	3.6	3.7	4.1	4.8	5.4	6.0	6.3	5.7	0.5	2.5
マレーシア	3.2	2.3	2.2	2.2	2.3	2.8	3.4	4.4	4.7	-1.1	2.5
フィリピン	3.1	3.0	3.0	4.0	4.9	5.4	6.1	6.4	6.3	2.4	3.9
シンガポール	4.0	4.0	4.3	5.4	5.4	5.6	6.7	7.0	7.5	-0.2	2.3
台湾	2.6	2.8	2.3	3.3	3.4	3.4	3.6	3.4	2.7	-0.2	2.0
タイ	2.2	3.2	5.3	5.7	4.7	7.1	7.7	7.6	7.9	-0.8	1.2

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2020Q4	2021Q1	2021Q2	2021Q3	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2020	2021
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.9	-3.2	-3.3	-3.5	-3.5	-3.9	-3.9	-3.0	-3.6
日本	2.9	3.0	3.5	3.4	2.9	2.3	1.8	2.9	2.9
ユーロ圏	1.9	2.6	3.1	3.0	2.5	1.7	0.9	1.9	2.5
英国	-2.5	-2.5	-2.6	-3.5	-2.6	-4.2			
豪州	2.4	3.0	3.1	3.5	3.2	2.4	2.3	2.4	3.2
カナダ	-1.8	-0.9	-0.7	-0.1	0.0	0.1	0.2	-1.8	0.0
エマージングアジア									
中国	1.6	2.3	1.9	1.9	1.8	1.8	2.1	1.7	1.8
香港	7.0	9.3	9.5	9.2	11.3	12.0	10.7		
インド	1.3	0.9	0.4	-0.5	-1.1	-1.2	-2.1	1.3	-1.1
インドネシア	-0.4	-0.2	-0.1	0.2	0.3	0.4	0.9	-0.4	0.3
韓国	4.4	4.9	5.6	5.8	5.1	4.7	4.2		
マレーシア	4.4	4.5	4.8	3.8	3.5	2.8	2.1		
フィリピン	3.5	3.4	1.8	0.3	-1.8	-2.8	-4.5		
シンガポール	16.8	16.8	16.7	17.0	18.1	19.7	19.4	16.8	18.1
台湾	13.9	14.6	15.3	14.5	14.7	15.1	14.7	13.9	14.7
タイ	4.2	1.7	0.7	-1.8	-2.2	-2.3			

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	3.00-3.25	引き締め: 2022/3/16	0.00-0.25	2022/9/21	+75bp	2022/9/21	+75bp
日本	当座預金残高の政策金利	-0.10	緩和: 2008/10/30	0.30	2016/1/29	-20bp	2022/9/22	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	0.75	引き締め: 2022/7/21	-0.50	2022/9/8	+75bp	2022/9/8	+75bp
英国	バンク・レート	2.25	引き締め: 2021/12/16	0.10	2022/9/22	+50bp	2022/9/22	+50bp
豪州	キャッシュ・レート	2.35	引き締め: 2022/5/3	0.10	2022/9/6	+50bp	2022/9/6	+50bp
カナダ	翌日物金利	3.25	引き締め: 2022/3/2	0.25	2022/9/7	+75bp	2022/9/7	+75bp
エマージングアジア								
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.65	緩和: 2012/6/8	6.31	2022/8/22	-5bp	2022/9/20	現状維持
インド	翌日物レポ金利	5.90	引き締め: 2022/5/4	4.00	2022/9/30	+50bp	2022/9/30	+50bp
インドネシア	7日物リバースレポレート	4.25	引き締め: 2022/8/23	3.50	2022/9/22	+50bp	2022/9/22	+50bp
韓国	7日物レポ金利	2.50	引き締め: 2021/8/26	0.50	2022/8/25	+25bp	2022/8/25	+25bp
マレーシア	翌日物金利	2.50	引き締め: 2022/5/11	1.75	2022/9/8	+25bp	2022/9/8	+25bp
フィリピン	翌日物金利	4.25	引き締め: 2022/5/19	2.00	2022/9/22	+50bp	2022/9/22	+50bp
台湾	再割引金利(公定歩合)	1.500	引き締め: 2022/3/17	1.125	2022/6/16	+12.5bp	2022/6/16	+12.5bp
タイ	翌日物レポ金利	1.00	引き締め: 2022/8/10	0.50	2022/9/28	+25bp	2022/9/28	+25bp
ベトナム	リファイナンス金利	4.00	引き締め: 2022/9/22	4.00	2022/9/2	+100bp	2022/9/22	+100bp

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBILレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行